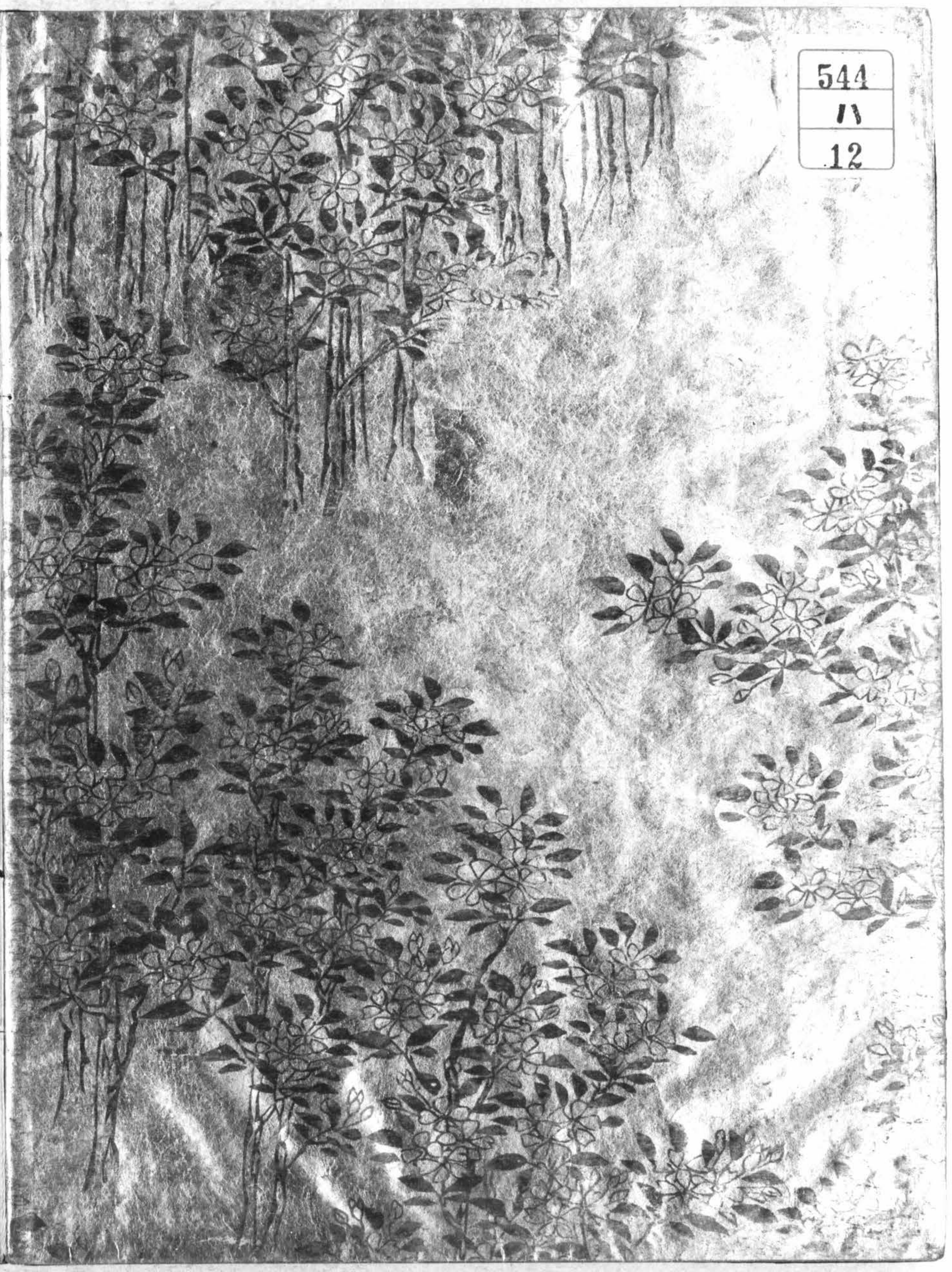
新古今和歌集

上

544
ハ
12



544
ハ
12

九州大學圖書
九州大學圖書館
昭和 24. 3. 19
182173

新古今和歌集序

夫和哥者群徳之祖百福之宗也玄象天成五際
六情之義未著素鵞地静三十一字之詠甫興
尒来源流寔繁長短雖異或抒下情而達聞或
宣上徳而致化或属讌而書懐或採艶而言志
誠是理世撫民之鴻徽賞心楽事之亀鑑者也是以
聖代明時集而録之各窮精微何以漏脱然猶崑岳
玉採之有餘鄧林之材伐之不尽物既如此哥亦宜然
仍詔参議右衛門督源朝臣通具大蔵卿藤原朝臣有家
左近衛中将藤原朝臣定家前上総介藤原朝臣家隆

左近衛少將藤原雅經不擇貴賤高下令撰錦
句玉章神明之詞佛陀之作爲表希夷雖同編始
於萬葉迄于當時彼此總編各得呈進無至玄圃花芳
之朝璞砌風涼之夕翫難波津之流尋香山
之跡蹈披其篇章躬筆硯或書世或吟或詠接摩
叢之牙角者悉編採擇之於毛裁成而得二千首
類聚而爲二十巻名曰新古今和歌集矣時令節物之
篇屬四序而星如羅感雜詠之什並群品而雲如
布綜緝之致蓋云備矣伏惟未自代邸而踐天子之
位謝於汾宮而追絡陽之蹤

今上陛下之嚴親也從玄深帝（遑イ）道之淵詢日域朝廷之
本之也爭不崇我國之習俗方今奎宰合契英哉
所仁風化之業万春來日野之草遊康月宴之拜千秋
秋津洲之塵雖辭誠庸者而五載之何可願深毫
採（操イ）殘之忘政撰斯一集永欲傳不朽彼上古之万葉
集者蓋是和歌濫觴也編次之部同准之儀星序雖邈
桐幹雖披延喜有古今集四人含綸命而成之天暦有
後撰集五人奉綸旨而成之其後有拾遺後拾遺金
葉詞花千載等集雖出於聖主數代之勅殊恨内
撰者一方之家因茲訪延喜天暦二朝之遺美定法河

歩唐之輩之英豪桃神仙之風展刊備之席焉已新集
之内拜七代抽万葉集之中更拾七代集之外深索
而微長其遺廣求而小善[片イ]必挙但雖犹絹於山野微
禽自逃雖連筌於江湖小鮮倫漏誠當視聴之不逮
定可篇章之拾遺今只随採得且所勒修也掃於
古今有不載
當代之御製自後撰而初加其時之天章各考一部
不過十篇而今不入之自承已餘之十首六義共相
互一両雖可足係其風骨之絶妙選可露詞之多
加倫以執道之思不顧多情之眼凡厥取捨者嘉尚
之餘特運冲襟伏羲基皇徳而四十万年異域自雖
記　我朝之書史云神武帝功而八十二代當朝
未聞数輩之撰集矣定知天下之部人士女謳歌斷
道之遇逢矣不獨記仙洞無何之郷可嘲風弄月之
興亦欲呈皇家元久之歳可温故知新之心流撰之
趣不在茲乎歴暦乙丑壬春三月之尒

新古今和歌集序

やまとうたはむかしあめつちひらけはしめて人のしわ
さいまたさたまらさりしときあし原の中津国のこ
とのはとして稲田姫素鵞のさとよりそつたはれ
りけるしかありしよりこのかたそのみちさかりにおこ
りそのなかれいまにたゆることなくして色にふけり心
をのふるなかたちとし世をおさめ民をやはらく
る道とせりかゝりけれは代々の御門もこれをすて
たまはすえらひをかれたる集ともいへいへのもてあ
そひものとしてことはの花のこれる木のもとかたく

おもひの露もれたる草かくれもあるへからすしかは
あれとも伊勢の海きよきなきさの玉はひろふ
ともつくることなくいつみのそましけき宮木はひく
ともたゆへからすものみなかくのことしうたのみち
またおなしかるへしこれによりて右衛門督
源朝臣通具大蔵卿藤原朝臣有家左近中将
藤原朝臣定家前上総介藤原朝臣家隆左近
少将藤原朝臣雅経等におほせてむかしいま時
をわかたすたかきいやしき人をきらはすめにみえ
ぬ神ほとけのことのはもうはたまのゆめにつたへたる

色よき事まさりゆくとも人あまねくあやめも
なおしえてはそれよりつたはるつたはきのいにしへの
とおもちたるを世人の雲になりひさしくめくりきし
みえとれにかしき花さうそうさき胡鬼のみきれ風
すこしけゆよへちるえはのちるれをくみそすみ
みこまるをとゝのふめわさの山のあそとしつかそよ
けわさきをやつてし万葉集にいまる歌はこれ
をのそうとも古今にわこの三七代の集にいまる
歌をとはこれをのもろゝとるし但しと様のるの
おそい筆にあるを波くも宛とすゑのおみそを

もれ歌はすくなし道につたへるものありけむかしは昔も
をちかたにありやすいまも又立てさるところあるまて
おつあたる哥ふるくえらひまかきつけて新古今
和歌集と申すよし立田に山かさし花をとゝの
ひらかれ又いにしへ遠さかる神なひの郭公秋の風
ふちるそことはにかそえたる人の思ひのる
みねに雪はける草にかくしてみえおらたよそ
ちとけなるへし世の人なるもたゝすこしにとも
ちそとのそえて民のはなれてすゑの露ともの
つくまえつ人の世をさきらわするは道の

へにわかれをしたひあまさかるひなのなかちにみやこを
おもひたかまの山の雲ゐのよそなる人をこひなか
らの橋のなみにくちぬる名ををしみても心うちに
うこきことはほかにあらはれすといふことなし
いはんや住吉の神はかたそきのことの葉をの
こし伝教大師はわかたつ杣のおもひをのへたまへ
りかくのことき しらぬむかしの人の心をあらはし
ゆきてみぬさかひのほかのことをしるはたゝこの
みちなるへし 抑むかしハいつゝひゆつりしあとを
たつねてあまつひつきの位にそなはりいまハやまとかん
しかれをのかれてこやの山にすみかをしめたりといへと
もよをすなほなるはおこなふ道をまもるとその
位を去るといへとも政をわすれすしてあまねくみ
ちかしきをきことわけ雲のうへのいにしへもかはら
さかえはなひけのまつりことをみよのるひぬ
ふちなく四方のうみおたやかにしはしまの月かゝみすま
て和歌のうらみちしほつゐさかしまの道をもて
あそひてこの集をえらひてなかき世につたへ
むとおもふの万葉集ハ歌の源なりはるかにこと
なりにて昔の人たることとし延喜のひしりの

の御代には四人に勅して古今集をえらはし
め天暦のかしこき御代には五人におほせて後撰
集をあつめしめ給へりそのゝち後拾遺後拾遺
金葉詞花千載等の集はみな一人これをうけ
給はれるゆへに聞もらしみをよはさる所もあるへし
よりて古今後撰のあとをわすれす五人の
輩をさためてしるしたてまつらしむるなりそのうへ
みつからさため手つからみかけることはとをく
もろこしのふみの道をたつぬれは浜ちとり
あとありといへとも我国やまとことの葉はしまり
て後くれ竹のよゝにかゝるためしなむなかりける
この中にみつからの哥をのせたることふるきた
くひはあれと十首にはすきさるへし然るを
いまかれこれえらへる所三十首にあまれりこれ
またみる人のめつらしけるをはおほくもちゐくへとも
へましあふるきゆへにえらひていつれとやす
かくされる森のくちはゝとゝまりみすはのも
くれまてをともわするゝことはみちにふけるお
もひふかくして後のあさけりをかへりみさるへし
ときに元久二年三月廿六日なむしるしをは

ねるめ哉いやしきみてをたつとするおまやしいその
こみあるけおと哉を聞と之よはちかれをとくそて
みちもとをところねる吟人よところのをといのこゝを
ね道をしるしつれハ露しるをハあつたゆるもし
松あく風のちらしせとこそ秋ハめくるをそう
紀月のくもきらくしてこの時よあるそすよ
あこれをよろこひけみえらるとあるうたあハ
いやるもしのこま哉なうし

新古今和歌集巻第一

春哥上

はるたつ心をよみ侍ける　　摂政太政大臣

みよしのは山もかすみて白雪のふりにし里にはるはきにけり

はるのはしめの哥　　太上天皇

ほのほのとはるこそ空にきにけらし天のかく山霞たなひく

百首哥たてまつりし時春の哥　　式子内親王

山ふかみはるともしらぬ松のとにたえたえかゝる雪の玉水

五十首哥たてまつりし時　　宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそみえね春はきにけり

入道前関白太政大臣家に百首
哥よませ侍ける時立春の心を

皇太后宮大夫俊成

今日といへはもろこしまても行春を都にのみと思ひけるかな

題しらす　　俊恵法師

春といへはかすみにけりなきのふまて浪まにみえしあはちしま山

題しらす　　西行法師

岩まとちし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむらむ

題しらす　　読人不知

風ませに雪はふりつゝしかすかに霞たなひく春はきにけり

ときはいまは春になりぬとみ雪ふる遠き山へにかすみたなひく

堀河院に百首哥奉りける時残の雪の
心をよみ侍ける

権中納言国信

春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪

題しらす　　山辺赤人

明日からはわかなつまんとしめし野に昨日も今日も雪はふりつゝ

天暦の御時屏風の哥　　壬生忠見

春日野の草はみどりに成にけりわかなつまんと誰かしめけん

崇徳院に百首歌奉りける時春の歌　前参議教長

わかなつむ袖とぞ見ゆるかすが野の飛火の野べの雪のむら消

延喜御時の屏風に　紀貫之

ゆきて見ぬ人もしのべと春の野のかたみにつめるわかななりけり

述懐百首歌よみ侍りける若菜

皇太后宮大夫俊成

沢におふるわかなならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり

日吉社によみて奉りける子日の歌

さゞなみや志賀の浜松ふりにけり誰が代にひける子日なるらん

百首歌奉りし時　藤原家隆朝臣

谷川のうち出る浪も声たてつ鶯さそへ春の山かぜ

うまうの次に　太上天皇

鶯のなけどもいまだふる雪に杉の葉しろき逢坂の山

堀河院に百首歌奉りける時残りの雪の心を

よみ侍りける　藤原仲実朝臣

春きては花とも見よとかた岡の松のうは葉にあは雪ぞふる

題しらず　中納言家持

まきもくのひはらもいまたくもらねはこ松か原にあは雪そふる

よみ人しらす

今さらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春日となりにしものを

凡河内躬恒

いつれをか花とはわかむふるさとのかすかの原にまたきえぬ雪

家百首哥合に餘寒の心を

摂政太政大臣

空はなをかすみもやらす風さえて雪けにくもる春の夜の月

和哥所にて春山月といふことをよめる

越前

山ふかみなをかけさむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ

詩をつくらせて哥にあはせ侍しに水郷春望と

いふことを

左衛門督通光

みしま江や霜もまたひぬあしの葉につのくむほとの春風そ吹

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしのわか葉をこゆる白浪

春哥とて

西行法師

ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清瀧川の水の白浪

源重之

梅かえにものうきほとにちる雪を花ともいはし春の名たてに

山部赤人

あけはなる山ちかくなりてうちきつる鶯のこゑ

読人しらす

梅かえに鳴てうつろふ鶯のはね白妙に淡雪そふる

百首歌奉りし時

惟明親王

鶯のなみたのつらゝうちとけてふるすなからや春をしるらん

題しらす

志貴皇子

岩そゝくたるみのうへのさわらひのもえ出る春になりにけるかも

百首歌奉りし時

前大僧正慈円

あまの原ふしのけふりの春の色のかすみになひくあけほのゝ空

崇徳院に百首歌奉りける時

藤原清輔朝臣

あさかすみふかくみゆるや烟たつむろのやしまのわたりなるらん

晩霞と云事をよめる

後徳大寺左大臣

なこの海の霞のまよりなかむれは入日をあらふおきつ白浪

をのこともに詩をつくらせて哥にあはせ侍りしに

水郷春望といふ事を

太上天皇

見わたせは山もとかすむ水無瀬川夕へは秋となにおもひけん

摂政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心
をよみ侍りける　　藤原家隆朝臣
霞たつすゑの松山ほの〴〵と浪にはなるゝよこ雲の空
守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに
藤原定家朝臣
春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるゝ横雲の空
きさらぎまで梅の花咲き侍らざりける年よ
み侍りける　　中務
しるらめや霞の空をながめつゝ花もにほはぬ春をなげくと
守覚法親王五十首歌に
藤原定家朝臣
大空は梅のにほひに霞みつゝくもりもはてぬ春の夜の月
題しらず　　宇治前太政大臣
をられけりくれなゐにほふ梅花けさしろたへにふれる雪かと
かきねの梅をよみ侍りける
藤原敦家朝臣
あるじをばたれともわかず春はたゞかきねの梅をたづねてぞみる
梅花遠薫といふ心をよみ侍りける
源俊頼朝臣
心あらばとはまし物を梅が香にたが里よりかにほひきつらん

百首哥たてまつりし時　藤原定家朝臣

梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影そあらそふ

藤原家隆朝臣

むめかゝにむかしをとへは春の月こたへぬ影そ袖にうつれる

千五百番哥合に　右衛門督通具

梅花たか袖ふれしにほひそと春やむかしの月にとはゝや

皇太后宮大夫俊成女

むめの花あかぬ色香もむかしにておなしかたみの春の夜の月

梅花によそへて大弐三位につかはしける　権中納言定頼

見ぬ人によそへて見つる梅花ちりなむ後のなくさめそなき

返し　大弐三位

春ことに心をしむる花の枝にたかなをさりの袖かふれつる

二月雪落衣といふ事をよみ侍ける　康資王母

梅ちる風にこえてや吹つらんかほれる雪の袖にみたるゝ

題しらす　西行法師

とめこかし梅さかりなるわか宿をうときも人はおりにこそよれ

百首哥たてまつりし時

式子内親王

なかめつる今日はむかしになりぬとも軒ばの梅はわれをわするな

土御門内大臣家にて梅香留袖といふ事をよみ
侍りける　藤原有家朝臣

ちりぬれはにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風の吹

題しらず　八条院高倉

ひとりのみながめてちりぬ梅の花しるばかりなる人はとひこで

文集嘉陵春夜詩不明不暗朧々月といへることをよみ侍りける　大江千里

てりもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき

祐子内親王ふぢつぼにすみ侍りけるに女房上人などさるべきかぎり物語りして春秋
のあはれいづれにか心ひくなどあらそひ侍りける
に人々おほく秋に心をよせ侍りければ

菅原孝標女

浅みどり花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月

百首哥奉りし時

源具親

難波がたかすまぬ波もかすみけりうつるもくもる朧月夜に

摂政太政大臣家百首哥合

寂蓮法師

今はとてたのむの雁もうちわひぬ朧月夜の明ほのゝ空

刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみてつかはしける

皇太后宮大夫俊成

きく人そ涙はおつる帰る雁なきて行なる明ほのゝ空

題しらす　よみ人しらす

ふるさとに帰る雁かねさよ更て雲路にまよふ声きこゆなり

帰雁を　摂政太政大臣

忘るなよたのむの沢を立雁もいなはの風の秋の夕暮

百首歌奉りし時

帰る雁いまはの心ありあけに月と花との名こそ惜しけれ

守覚法親王五十首歌よませ侍りし

藤原定家朝臣

霜まよふ空にしをれし雁かねの帰るつはさに春雨そふる

閑中春雨といふ事を

大僧正行慶

つくゝと春のなかめのさひしきはしのふにつたふ軒の玉水

寛平御時きさいの宮の歌合歌

伊勢

水の面にあやふきみたる春雨や山のみとりをなへてそむらん

百首哥よみし時　　摂政太政大臣

常盤なる山のいはねにむす苔のそめぬみとりに春雨そふる

清輔朝臣のもとにて雨中苗代といふ事をよめる　　勝命法師

雨ふれはをたのますらをいとまあれや苗代水をそらにまかせて

延喜御時屏風に　　凡河内躬恒

春雨のふりしより青柳のいとのみとりそ色まさりける

太宰大弐高遠

うちなひき春はきにけり青柳のかけふむ道に人のやすらふ

輔仁親王

みよし野の大川のへの古柳かけこそみえね春めきにけり

百首の哥の中に　　堀河院御哥

わか宿の柳のいとのたえまなくみたれてみゆる

建仁元年三月哥合に霞隔遠樹といふ事を　　権中納言公経

高瀬さす六田のよとの柳原みとりもふかくかすむ春かな

百首哥よみ侍る時春の哥とてよめる　　殷富門院大輔

春風のかすみ吹とくたえまよりみたれてなひく青柳の糸

千五百番哥合に春の哥

藤原雅経

しら雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞ吹く

藤原有家朝臣

青柳のいとに玉ぬく白露のしらずいく世の春か経ぬらん

宮内卿

うすくこき野べの緑の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え

題しらず　　曾禰好忠

あらを田のこぞのふるあとの古よもぎ今は春べとひこばえにけり

壬生忠見

やかずとも草はもえなん春日野をただ春の日にまかせたらなむ

西行法師

吉野山桜が枝に雪ちりて花おそげなる年にもあるかな

白河院鳥羽におはしましける時人々山家に待花といふ心をよみ侍りける

藤原隆時朝臣

桜花さかばまづ見むと思ふまに日数へにけり春の山里

亭子院歌合に　　紀貫之

わが心春の山べにあくがれてながながし日をけふもくらしつ

摂政太政大臣家百首歌合に野遊の心を

藤原家隆朝臣

なよとちるこそはるまてと都ね花の宿かせ野への鶯
ろそ春なれは　式子内親王

今桜さきぬとみえてうすくもり春にかすめる世のけしき哉

題しらす　よみ人しらす

ありて世はなほてちるらん春雨に花の下ひもいつかとくらん

中納言家持

ゆかむ人こむ人しのへ春霞たつたの山のはつさくら花

花のうたとてよみ侍ける

西行法師

よしの山こそのしほりの道かへてまたみぬかたの花をたつねん

和哥所にて哥つかうまつりしに春の哥とて

よめる　寂蓮法師

かつらきやたかまの桜さきにけりたつたのおくにかゝるしら雲

題しらす　よみ人しらす

いその上ふるきみやこをきてみれは昔かさしゝ花咲にけり

源兼忠朝臣

たろ人の年ハおいてゆかむわか小田をかへしても花をたちてみく
やへ桜あたて人よつかしてけんれハ

道命法師

白雲のたつたの山の八重桜いつれを花とわきておりけん

五十首歌たてまつりし時　　藤原定家朝臣

しら雲の春はかさねてたつた山をくらのみねに花匂ふらし

題しらす　　藤原家隆朝臣

吉野山花やさかりに匂ふらんふるさとさらぬみねのしら雪

和歌所歌合に羇旅花といふことを　　藤原雅経

いはねふみかさなる山をわけすてて花もいくへのあとのしら雲

又十首歌たてまつりし時

たつねきて花にくらせる木のまより待つとしもなき山のはの月

落花といふ心を　　前大僧正慈円

あすちらす人もこそねぬ夜半の露をはらふ花よ春風

千五百番歌合に　　右衛門督通具

いそのかみふるのの桜たれうゑて春はわすれぬかたみなりけん

正三位季能

花そみる道のしは草ふみわけて吉野の宮の春のあけほの

藤原有家朝臣

朝日影にほへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとそみる

新古今和歌集巻第二

春歌下

釈阿和歌所にて九十賀し侍りし折屏風に
山に桜咲きたる所を　太上天皇

桜咲くとを山鳥のしだりをのながながし日もあかぬ色かな

千五百番歌合に
皇太后宮大夫俊成

いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのの花

百首歌に　式子内親王

はかなくて過ぎにしかたを数ふれば花に物思ふ春ぞへにける

内大臣に侍りける時望山花といへる心をよみ
侍りける　京極前関白太政大臣

白雲のたなびく山の山桜いづれを花と行きて折らまし

祐子内親王家にて人々花の歌よみ侍りけるに
権大納言長家

花の色にあまぎる霞立ちまよひ空さへにほふ山桜かな

題しらず　赤人

ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日もくらしつ

在原業平朝臣

花にあかぬなげきはいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし

凡河内躬恒

いもやすくねられさりけり春の夜ハ花のちるのみ夢にみえつゝ

伊勢

山桜ちりてみゆきにまかひなハいつれか花と春にとハなむ

貫之

わかやとのものなるからに桜花ちるをハえこそとゝめさりけれ

寛平御時后宮の歌合に

よみ人しらす

霞たつ春の山へにさくら花あかすちるとや鶯のなく

題しらす

赤人

春雨ハいたくなふりそ桜花またみぬ人にちらまくもをし

中納言兼輔

ちる花をちらてみよしのゝ山みれハ桜ハかゝるはたゝぬれ

貫之

花のかに衣ハふかくなりにけり木の下かけの風のまにまに

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

かせかよふねさめの袖の花のかにかほる枕の春の夜の夢

守覚法親王五十首よませ侍りけるとき

藤原家隆朝臣

このほとハしるもしらぬも玉鉾のゆきかふ袖ハ花のかそする

摂政太政大臣家に五十首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

またやみむかたののみのゝ桜かり花の雪ちる春のあけほの

花の歌読侍りける

祝部成仲

ちりちらすおほつかなきは春霞たなひく山の桜なりけり

山里にまかりて読侍りける

能因法師

山里の春の夕暮きてみれは入あひのかねに花そちりける

題しらす

恵慶法師

桜ちる春の山への うかりけり世をのかれにとこしかひもなく

花見侍る人にさそはれてよみ侍る

康資王母

山桜花の下風吹にけり木のもとことの雪のむら消

題しらす

源重之

春雨のそほふる空のをやみせすおつる涙に花そちりける

雁かねのかへる羽風やさそふらん過行峯の花ものこらぬ

百首歌めしし時春の歌

源具親

時しもあれたのむの雁のわかれさへ花ちる比のみよしのゝ里

又山花といふ心を　大納言経信
山ふかみ杉のむらたちみえぬまて尾上の風に花のちるかな
堀河院の御時百首歌たてまつりけるに花の歌　大納言師頼
木のもとの苔のみとりもみえぬまてやへちりしける山さくらかな
花十首よみ侍りけるに　左京大夫顕輔
麓まて尾上の桜ちりこすはたなひく雲とみてやすきまし
花落客稀といふ事を　刑部卿範兼
花ちれハとふ人まれになりはてゝいとひし風の音のみそする
題しらす　西行法師
なかむとて花にもいたくなれぬれはちるわかれこそかなしかりけれ
越前
山里の庭よりほかの道もかな花ちりぬやと人もこそとへ
五十首歌たてまつりしに湖上花を　宮内卿
花さそふひらの山風吹にけりこき行舟の跡みゆるまて
関路花を
あふさかや梢の花を吹からにあらしそかすむ関の杉むら

ちらでちりてよろつ時雨けり

二條院讃岐

山たかみ峯のあらしにちる花の月にあまぎる明がたのそら

崇徳院御製

山たかみ岩ねの桜ちる時はあまのは衣なづるとぞみる

春日社歌合とて人によみ侍りし

刑部卿頼輔

あまをとめ袖のよそめかしら山わくはさくらみねの雲

家隆卿天王院の障子よしのの山かきたる

ところ

[illegible]天皇

みよしのの高ねの桜ちりにけりあらしもしろき春の明ぼの

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

桜色の庭の春風あともなしとはばぞ人の雪とだにみむ

むとせ三のひて大内の花のえんにまかり侍りし

小庭にちりて侍りし花をとめて硯のふたにいれ

へて桜殿のもとへたてまつりける

さか天皇

冬さへも庭ちるときさへとゝろき花まさなとは思ふとも色し

桜殿右大臣

さそはれぬ人のためにやのこりけむ明日よりさきの花の白雪

家のやへ桜ををらせて惟明親王のもとへ
つかはしける　式子内親王

やへにほふ軒はの桜うつろひぬ風よりさきにとふ人もかな

返し　惟明親王

つらきかなうつろふまてにやへ桜とへともいはてすくる心は

五十首哥奉りし時　藤原家隆朝臣

桜花夢かうつゝか白雲のたえてつねなき峯の春風

題しらす　皇太后宮大夫俊成女

恨みすやうき世を花のいとひつゝさそふ風あらはと思ひけるをは

後徳大寺左大臣

はかなさをほかにもいはし桜花さきてはちりぬあはれ世中

入道前関白太政大臣家に百首哥よませ侍
ける時　俊恵法師

なかむへきのこりの春をかそふれは花とともにもちる涙かな

花もちるとてよめる　殷富門院大輔

花もまたわかれん春は思ひ出よさきちるたひの心つくしを

千五百番哥合に　左近中将良平

ちる花のわすれかたみの峯の雲そをたにのこせ春の山風

落花といふことを　藤原雅経

しらせはや花おしむとも吹とめて来しハなかつまの山風

詠しつと　後白河院御製

打ゆるしあかてねしハ桜花今ハ木すゑをなかむはかりそ

落花のこゝろを　摂政太政大臣

吉野山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風そ吹

詠しける　大納言経信

ふるさとの花のさかりハ過ぬれと抜けける春の空かな

る春の中に　式子内親王

花ちりてそのいろとなくなかむれハむなしき空に春雨そふる

小野宮太政大臣ゆかしく花見に月輪寺にて

花見侍りけるによめる　清原元輔

たかためにあすハのこさむ山桜こほれてにほへけふのかたみに

曲水宴をよめる　中納言家持

から人の舟をうかへてあそふてふけふそわかせこ花かつらせよ

紀貫之曲水宴しける時月入花灘暗といふ事をよみ侍りける　坂上是則

花なかす瀬をもみるへき三日月のわれて入ぬる山のをちかた

雲林院のさくらみにまかりけるにちりはてゝ

わつかにかたえにのこりて侍りけれハ

良暹法師

たつねつる花もわか身もおとろへて後の春ともえこそちきらね

千五百番哥合に　寂蓮法師

思ひたつ鳥ハ古巣もたのむらんなれぬる花のあとの夕くれ

ちりにけりあはれうらみのたれなれは花のあととふ春の山風

権中納言公経

春ふかくたつねいるさの山のはにほのみし雲の色そのこれる

百首哥奉し時　摂政太政大臣

初瀬山うつろふ花に春くれてまかひし雲そ峰にのこれる

藤原家隆朝臣

芳野川きしの山吹咲にけり峰の桜はちりはてぬらん

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川

堀河院の御時百首哥たてまつりけるに

中納言国信

いはねこす清瀧川のはやけれは浪おりかくる岸の山吹

題しらす　厚見王

蛙鳴神なひ川にかけみえていまやさくらん山吹の花

延喜十三年亭子院哥合に

藤原興風

足曳の山吹の花ちりにけりゐてのかはつは今やなくらむ

飛香舎にて藤花宴侍ける

延喜御哥

かくてこそ見まくほしけれ万代をかけてにほへる藤浪の花

天暦四年三月十四日ふちつほにわたらせ給ひて

花おしませ給ける　天暦御哥

まとゐして見れともあかぬ藤浪のたゝまくおしき今日にも有哉

清慎公家屏風に　貫之

くれぬと思ものから藤の花さける宿には春そ久しき

藤の松にかゝれるをよめる

みとりなる松にかゝれる藤なれとをのかころとそ花は咲ける

春の暮つかた実方朝臣のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

ちりのこる花もやあるとうちむれてみ山かくれをたつねてしかな

出家し侍けるころよみ侍る

大僧正行尊

木のもとのすみかも今はあれぬへし春しくれなはたれかとひこん

五十首哥たてまつりし時

寂蓮法師

くれて行春のみなとはしらねとも霞におつるうちの柴舟

山家三月尽といふ事をよみ侍りける

藤原伊経

たづねきて花ゆく人の待つるもけふくれぬるみ山への春

題しらず　　皇太后宮大夫俊成女

いかのみかみしま田をおりて[illegible]

寛平御時きさいの宮の歌合に

よみ人しらず

まてといふにとまらぬものとしりながらしひてぞをしき春の別は

山家暮春といへることを

宮内卿

柴の戸をさすや日影のなごりなく春くれかかる山の端の雲

百首歌奉りし時

摂政太政大臣

あすよりはしかの花そのまれにだにたれかはとはむ

[illegible]卿

新古今和歌集巻第三

夏哥

題しらす　持統天皇御哥

春すきて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかく山

素性法師

をしめともとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな

更衣をよめる　前大僧正慈円

ちりはてゝ花のかけなきこのもとにたつことやすき夏衣かな

春をくりてきのふといふことを　源道済

夏衣きていくかにか成ぬらんのこれる花はけふもちりつゝ

夏のはしめの歌とてよみ侍ける　皇太后宮大夫俊成女

おりふしもうつれはかへつ世中の人の心の花そめの袖

卯花如月といふことをよませ給ける　白河院御哥

卯花のむらくさける垣ねをは雲まの月のかけかとそみる

題しらす　大宰大弐重家

うの花の咲ぬる時は白妙の浪もてゆへるかきねとそみる

斎院に侍ける時神たちにて

式子内親王

風しもやおきて草にかはらぬ野への露の曙
あさひまよへる

小侍従

いかにせむかきねの山みちの草もしげりあひてしつくにとむ
宮腰て天まて見の涼しさにあさからのねよ見さしつゝ

藤原雅経

野へはなほあさちのねよりかる草みちのかたをとはさや
宇治河よ百首のうちにてよみける時夜寄

待賢門院安芸

さくらはなみれはよその下草もとほさくゝはなれて花のちりぬる

題しらず

花ちりし庭の木の葉もしげりあひて天照月の影ぞ稀なる
宿よくと恨みし人のさへみると草葉にまてて思ふ比かな

藤原元真

夏草はしげりにけりな玉鉾の道行人もむすぶばかりに

延喜御製

夏草はしげりぬれども郭公なとかわか宿にひとこゑもせぬ

柿本人麿

鳴こゑをえやは忍ばぬ郭公初卯の花の影にかくれて
賀茂葵よりして待とまる人のかざしてすれ

あるらむとおもふ明かたのそらとふのまちえて
くみて侍られしハ　宗武卿
郭公こゑをきく程をかへりみの松の木下にたちやすらひし
かしまにもあらぬわれさへおもひなくまひの
たちけるかな　弁乳母
子規みやまにいかなる花もいまはの宿の郭きこえん
題しらす　よみ人しらす
さ月山うの花月よ郭公きけともあかす又なくらむかも
たつみつをまつつて鳴や五月やみまつ山の山かくれ
中納言家持
郭公こゑをいぬる夜はいそへ人のいをやすくねる
大中臣能宣朝臣
郭公鳴つるかたをなかむれはたゝありあけの月そのこれる
大納言経信
こゑとなくつとすゝき子規にきゝすてねとも
待ある因郭公となく
白河院御製
郭公あかすともねさめのひねハきかぬ人をきかれのとる因
題しらす　花園左大臣
きてたにねられぬ時そ待よこゝろみにゆるして

神たちにて郭公をきゝて

前中納言匡房

卯花の垣ねならねと子規月のかつらの影になくなり

入道前関白太政大臣家に百首哥よませ侍りける時郭公の哥

皇太后宮大夫俊成

むかし思ふ草の庵のよるの雨になみたなそへそ山郭公

雨そゝく花たち花に風すきて山郭公雲になくなり

題しらす　　相模

きかてたゝねなましものを郭公中々なりや夜半の一声

紫式部

誰か里もとひもやくると郭公心のかきりまちそわひにし

寛治八年前太政大臣高陽院の哥合に

郭公を　　周防内侍

夜をかさね待かね山の郭公雲ゐのよそに一声そきく

海道郭公といふことをよみ侍りける

按察使公通

二こゑときかすはいてし郭公いくよあかしのとまりなりとも

百首哥奉りし時夏の哥の中に

民部卿成範

郭公程一こゑハ思ひおきてわかれの枕に夢のなこりを
なくまれなるとある　八條院高倉
一こゑハ思ひそあへぬ郭公たそかれ時の雲のまよひに
千五百番哥合に　摂政太政大臣
有明のつれなくみえし月ハ出ぬ山郭公まつ夜なからに
後徳大寺左大臣家に十首哥よみ侍りけるに
よみてつかはしける　皇太后宮大夫俊成
わか心いかにせよとて郭公雲まの月のかけに啼らん
郭公の心を読侍ける
前太政大臣
郭公鳴ているさの山のはハ月ゆへよりもうらめしきかな
権中納言親宗
有明の月ハ待ぬに出ぬれと猶山ふかき郭公かな
杜間郭公といふ事を
すきにけりしのたの杜の郭公たえぬしつくを袖にのこして
題しらす　藤原家隆朝臣
いかにせむこぬ夜あまたの郭公またしと思へハむら雨の空
百首哥の中に　式子内親王
こゑはして雲路にむせふ郭公なみたやそゝく宵のむら雨
千五百番哥合に　権中納言公経

郭公猶うとまれぬ心かなゝかなく里のよその夕くれ

題しらす　西行法師

きかすともこゝをせにせん郭公山田の原の杉のむらたち

郭公ふかきみねより出にけり外山のすそに声のおちくる

山家暁郭公といへる心を　後徳大寺左大臣

をさゝ吹しつのまろやのかりのとを明方に鳴子規かな

五十首哥人〳〵によませ侍ける時夏の哥とて
よみ侍ける　摂政太政大臣

うちしめりあやめそかほる郭公なくやさ月の雨の夕暮

述懐によせて百首哥よみ侍ける時　皇太后宮大夫俊成

けふは又あやめのねさへかけそへてみたれそまさる袖の白玉

五月五日くす玉つかはして侍ける人に　大納言経信

あかなくにちりにし花のいろ〳〵はのこりにけりな君か袂に

局ならひにすみ侍ける比五月六日もろともになかめ
あかしてあしたになかきねをつゝみて紫式部
につかはしける　上東門院中将

なへて世のうきになかるゝあやめ草けふまてかゝるねはいかゝみる

せし　　　　　　　　　　式部卿

なよとくあやなくやハかてそけすまもよりまよふねこそ絶ね
山田早苗とる人々を

大納言経信

さなへとる山田のかけひもりにけりひくしめ縄に露そこほるゝ

釈阿に九十賀たまはせける時屛風に五月
雨　　　　　　　　　　　摂政太政大臣

小山田にひくしめ縄のうちはへてくちやしぬらん五月雨の比

題しらす　　　　　　　　伊勢大輔

いかはかりたこのもすそもそほつらん雲まもみえぬ比の五月雨

大納言経信

みしまえの入江のまこも雨ふれはいとゝしほれてかる人もなし

前中納言匡房

まこもかるよとの沢水ふかけれと底まて月のかけハすみけり

雨中木繁といふ心を

藤原基俊

玉かしハしけりにけりな五月雨にはもりの神のしめはふるまて

百首歌よませ侍ける

入道前関白太政大臣

五月雨ハおふのかはらのまこも草からてや浪の下にくちなむ

けふそれの人をと　藤原定家

玉鉾のみちゆき人のことつても絶てほとふる五月雨の比

五月雨の雲のたえまを詠めつゝ窓より西に月を待かな　荒木田氏良

百首哥奉りし時　前大納言忠良

あふち咲そともの木陰露落て五月雨はるゝ風渡也

五十首哥奉りし時　藤原定家

さみたれの月ハつれなきみ山よりひとりもいつる郭公かな

太神宮にたてまつりし夏の哥の中に　太上天皇

郭公雲ゐのよそに過ぬなりはれぬ思ひの五月雨のころ

建仁元年三月哥合に雨後郭公といへる心を　二條院讃岐

さみたれの雲まの月の晴行をしはし待ける郭公かな

題しらす　皇太后宮大夫俊成

誰か又花橘に思ひ出ん我もむかしの人となりなは

右衛門督通具

行末を誰しのへとて夕風に契りかをかん宿のたち花

百首哥奉りし時夏哥　式子内親王

かへりこぬ昔を今と思ひねの夢の枕にゝほふたち花

前大納言忠良

橘の花ちる軒のしのふ草むかしをかけて露そこほるゝ

五十首歌たてまつりし時　前大僧正慈円

さ月やみみしかき夜はのうたゝねに花橘の袖にすゝしき

題しらす　よみ人しらす

たつぬへき人は軒端のふるさとにそれかとかをる庭の橘

郭公花橘のかをとめてなくはむかしの人やこひしき

皇太后宮大夫俊成女

橘のにほふあたりのうたゝねハ夢もむかしの袖のかそする

藤原家隆

ことしより花咲初る橘のいかてむかしの香ににほふらん

守覚法親王五十首歌よませ侍ける時

藤原定家

夕暮ハいつれの雲のなこりとて花橘に風の吹らむ

堀川院御時きさいの宮にて閏五月時鳥

といふこゝろを人々つかうまつりし

権中納言国信

郭公さ月みな月わきかねてやすらふこゑそ空にきこゆる

題しらす

白河院御製

庭の表ハ月もらぬまてなりにけり梢に夏の陰しけりつゝ

恵慶法師

やへ葎しけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり

摂政太政大臣家にて十首歌合に桜川をよみ侍ける

前大僧正慈円

桜ちる春のわかれをしたふらん八十うち川の夕闇の空

寂蓮法師

うらみわひまたしいまはのみなれともおもひなれにし夕くれの空

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成

奈川にておさへし桜ちるなみのよそにくもらぬ夜の月かけ

藤原家隆

さゝなみやしかの浦風いかはかりこゝろにいりて月をみるらん

百首歌よみ侍ける時

摂政太政大臣

いまは又みぬむかしの春をのみひとりのとけき空をしのふ

式子内親王

宮こ辺ては月のひかりそすみまさるいとゝみやこのあきの夜の

夕暮はみそや秋風とこゝろある人こそつらけれ

春宮権大夫公継

宮ちかきいさゝむら竹風ふきて秋にかはれる夜のけしき

五十首歌よみ侍ける時

前大僧正慈円

むすふ手にかけみたれゆく山の井のあかてもそらに月のかたふきにける

最勝四天王院の障子に清見か関かき
たるところ　　権大納言通光
清見潟月はつれなき天のとをまたてもしらむ浪のうへかな
家に百首歌合の中に　　摂政太政大臣
かさねてもすゝしかりけり夏衣うすき袂にやとる月影
摂政太政大臣家にて詩歌をあはせられけるに
水辺冷自秋といふ事をよみ侍ける
　　有家朝臣
すゝしさは秋やかへりて初瀬川ふる川のへの杉の下陰
題しらす　　西行法師
道のへの清水なかるゝ柳陰しはしとてこそたちとまりつれ
よられつる野もせの草のかけろひてすゝしくくもる夕立の空
崇徳院に百首歌たてまつりける時
　　藤原清輔朝臣
おのつからすゝしくもあるか夏衣日も夕暮の雨のなこりに
千五百番歌合に　　権中納言公経
露すかる庭の玉さゝうちなひきひとむらすきぬ夕立の雲
雲隔遠樹といへる心をよみ侍ける
　　源俊頼朝臣
とをちには夕立すらし久方の天のかく山雲かくれ行

夏月をよめる　従三位頼政

庭の面はまたかわかぬに夕立の空さりけなくすめる月かな

百首歌の中に　式子内親王

ゆふ立の雲もとまらぬ夏の日のかたふく山にひくらしの声

千五百番歌合に　前大納言忠良

夕つく日さすや庵の柴の戸にさひしくもあるかひくらしの声

題しらす　摂政太政大臣

秋ちかきけしきの森に鳴蝉の涙の露や下葉そむらん

二条院讃岐

鳴蝉の声もすゝしき夕暮に秋をかけたる森の下露

蛍のとひのほるをみてよみ侍ける　壬生忠見

いつくとか夜は蛍ののほるらん行方しらぬ草の枕に

百首歌奉りし時　摂政太政大臣

蛍とふ野沢にしけるあしの根のよなよな下にかよふ秋風

刑部卿頼輔歌合し侍けるに納涼をよめる　俊恵法師

楸おふるかた山かけにしのひつゝ吹けるものを秋の夕風

瞿麦露滋といふことを　高倉院御歌

白露の玉もてゆへるませの中にひかりさへそふとこ夏の花

ゆふかほをよめる　　前太政大臣

しら露の情をきけることのはやほのくみえしゆふ顔の花

百首哥よみ侍ける中に

式子内親王

たそかれの軒はの荻にともすれはほにいてぬ秋そしたにこととふ

夏哥とてよみ侍ける

前大僧正慈円

雲まよふ夕に秋をこめなから風もたまらぬ荻の上かな

太神宮にたてまつりし夏哥中に

太上天皇

山里の峯のあま雲とたえして夕へすゝしき槙の下露

文治六年女御入内屏風に

入道前関白太政大臣

いはゐくむあたりのをさゝ玉こえてかつかつむすふ秋の夕露

千五百番哥合に　　宮内卿

かた枝さすをふのうらなし初秋になりもならすも風そ身にしむ

百首哥奉りし時

前大僧正慈円

夏衣かたへすゝしく成ぬなり夜やふけぬらむゆきあひの空

延喜御時月次屏風に

壬生忠岑

夏はつるあふきと秋の白露といつれかまつはをかんとすらん

貫之

みそきする川のせみれはから衣ひもゆふくれに浪そたちける

流をはらふまて

新古今和歌集巻第四

秋歌上

題しらす　中納言家持

神なひのみむろの山のくすかつらうら吹かへす秋はきにけり

崇徳院御歌

いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゝや秋とそ風もきこゆる

藤原季通朝臣

このねぬる夜のまに秋はきにけらし朝けの風のきのふにもにぬ

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

いつもきくふもとの里と思へともきのふにかはる山おろしの風

五十首哥よみ侍りける中に

藤原家隆朝臣

きのふたにとはんと思ひしつの國の生田の杜に秋はきにけり

最勝四天王院乃障子にたかさこかきたる
ところ

藤原秀能

吹風の色こそみえね高砂の尾上の松に秋はきにけり

五十首哥奉りし時

皇太后宮大夫俊成

ふしみ山松のかけよりみわたせはあくるたのもに秋風そ吹

守覚法親王家に五十首哥よませ侍りけるに

藤原家隆朝臣

明ぬるか衣手さむし菅原やふしみの里の秋のはつ風

千五百番哥合に

摂政太政大臣

ふか草の露のよすかを契にて里をはかれす秋はきにけり

右衛門督通具

あはれ又いかにしのはん袖の露野原の風に秋はきにけり

源具親

しきたへの枕のうへにすきぬなり露をたつぬる秋のはつ風

顕昭法師

吹くからにみにしむよハ高砂もなけてきそうの秋の夕風

越前

秋ハ唯心よりおく夕露を袖の外とも思ひける哉

五十首奉りてまつりし時秋哥

藤原雅経

手のすそてよろまこの下萩秋のまま家の窓よ秋風そ吹

太神宮よたてまつりし秋の哥の中よ

太上天皇

秋露のたまの原山風よみされてものハ秋そ悲しき

題しらす

西行法師

をしなへて物おもハぬ人にさへ心をつくる秋の初風

哀いかに草葉の露のこほるらん秋風たちぬ宮城野の原

崇徳院よ百首哥奉りけるとき

皇太后宮大夫俊成

乙女子か山田に引きそへて袖ぬれし秋ハきにけり

中納言中将よ侍りける時山家早秋といへる心を

よませ侍りけるに

法性寺入道前関白太政大臣

秋たつや立田の山の里なくて秋ハいかにと問ふ人もかな

題しらす

中務卿具平親王

夕暮ハ荻吹く風のをとまさる今はたいかにねさめせられん

後徳大寺左大臣

ゆふされは荻のはむけを吹風にことそともなく涙おちけり

崇徳院に百首歌たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成

をきのはも契ありてや秋風のをとつれそむるつまとなりけん

題しらす

七條院権大夫

秋きぬと松吹風もしらせけりかならす荻のうは葉ならねと

題をさくりてこれかれ歌よみ侍けるに

しのたの杜の秋風をよめる

藤原経衡

日をへつゝ音こそまされいつみなるしのたの杜のちえの秋風

百首哥に

式子内親王

うたゝねのあさけの袖にかはるなりならす扇の秋の初風

題しらす

相模

てもたゆくならすあふきのをきところわするはかりに秋風そ吹

大弐三位

秋風は吹むすへとも白露のみたれてをかぬ草の葉そなき

曽祢好忠

ねさめする荻のうは葉の露みたれてやはらはらきしも秋の初風

小野小町

吹むすふ風はむかしの秋なからありしにもにぬ袖の露哉

延喜御時月次屏風に

紀貫之

大空をわれもなかめてひこ星のつままつ夜さへひとりかもねむ

題しらす　赤人

この夕ふりくる雨は彦星のとわたる舟のかいのしつくか

宇治前関白太政大臣の家にて七夕の心をよみ侍りける

権大納言長家

年をへて住へき宿の池水は星合のかけもおもなれやせん

花山院御時七夕の歌つかうまつりける

藤原長能

袖ひちてわかてにむすふ水のおもに天つ星合の空をみるかな

七月七日たなはたまつりする所にてよみ侍る

祭主輔親

雲間より星合の空をみわたせはしつ心なき天の川浪

七夕のこゝろをよみ侍る

大宰大弐高遠

棚はたの天の羽衣うちかさねぬる夜すゝしき秋風そ吹

小弁

七夕の衣のつまは心して吹なかへしそ秋のはつかせ

皇太后宮大夫俊成

七夕のとわたる舟の梶の葉にいく秋かきつ露の玉章

百首哥の中に　式子内親王

なかむれは衣手すゝし久堅の天の河原の秋の夕くれ

家に百首哥よみ侍りける時

入道前関白太政大臣

いかはかり身にしみぬらん七夕のつま待よひの天の川風

七夕の心を　権中納言公経

星合の夕すゝしき天河紅葉の橋をわたる秋かせ

待賢門院堀河

七夕のあふせたえせぬ天河いかなる秋かわたりそめけん

女御徽子女王

わくらはに天の川浪よるなからあくる空にはまかせすもかな

大中臣能宣朝臣

いとゝしく思ひけぬへし七夕の別の袖にをける白露

中納言兼輔家屏風

貫之

七夕は今やわかるゝ天の川川きりたちて千鳥なくなり

堀河院御時百首の中によみ侍りける

前中納言匡房

川水にたつのたつるみけて〳〵すてそしられぬ秋萩の花
影しるしと

従三位頼政

狩ころもわれとハすらし露しけき野原の萩の花にまかせて

権僧正永縁

秋萩をおらてハすきし月草の花すり衣露にぬるとも

守覚法親王五十首よませ侍ける

顕昭法師

萩か花ま袖にかけてたかまとのおのへの宮にひれふるや誰

祐子内親王家紀伊

をく露もしつ心なく秋風にみたれてさけるまのゝ萩原

人麿

秋萩の咲ちる野への夕露にぬれつゝきませ夜ハふけぬとも

中納言家持

さをしかの朝たつ野への秋萩に玉とみるまておける白露

凡河内躬恒

秋の野をわけゆく露にうつりつゝわか衣手ハ花の香そする

小野小町

たれをかもまつちの山の女郎花秋とちきれる人そあるらし

藤原元真

女郎花野へのふるさとおもひ出てやとりし虫のこゑや恋しき

千五百番哥合に　左近中将良平

夕されハなかちのへの女郎花招きもやめぬ秋風ぞ吹

草花をよめる　西行法師

あらくまねきもやめぬ白雲のこゝろれてよそ路行人の秋風

小萩原露にまかるゝ雲のまそてまつらの時

藤原清輔朝臣

うす雲のまゝの花の色をあさ秋ハ御つとなれ思ひまし

入道前関白太政大臣にて侍ける時ゐそ

哥よみせ侍りて　皇太后宮大夫俊成

いとかくや袖をしほりし野へにもさて昔も秋の花ハみてしを

[illegible]くてこもり侍ける時秋の野をみてよみ侍ける

大納言経信

花みんと人やりつるぬの人はてゝんのまゝにはなれくらしつる

題しらす　曽禰好忠

なよてこむと思ふ種よりなゝかなしよおろとまる野邊の花

貫之

山乃のおかまよさけつれたさるのあるてあふよけなむ

坂上是則

うかれて浦ちかくみるかものまゝれてよそと思ふ比なれ

人麿

さ聲のいろのすゝきも尾花になりていもこそ招きもせん

よみ人しらす

をくら山みねのあらしの花すゝきそよくや秋の夕くれ

せれ敏子女王

ほのかにも風をたのみし花すゝきむすほゝれつゝ君にぬるらん

るゝ哥とて　式子内親王

花すゝき我よりほかにおきそへてなひくとこふ秋の露を

揺敢花咲るとて哥よみとて世に傳りける

八條院六条

野へことにまねくなる秋風をとゝめむほとに花すゝき

和哥所会に秋草花といふ題

左衛門督通光

ゆふぬるとて野へは山に入鹿の住かをしる萩の下風

題しらす　前大僧正慈円

月まとかなる見けるを萩の上葉にてしほる夕露の花

崇徳院御時百首めしけるに萩を

大藏卿行宗

月の影うつろひてくる夕霧の萩のしたにや風渡るや

秋の哥よみ侍ける

源重之女

秋はたゞものをこそ思へ露かゝる萩のうへ吹く風につけても

堀河院に百首歌たてまつりけるとき　　藤原基俊

秋風のやゝはださむく吹くなへに萩のうはゞのおとぞかなしき

百首歌たてまつりし時　　摂政太政大臣

をぎのはにふけばあらしの秋なるを待ちける夜半のさをしかの声

おしなべて思ひしことのかずかずになほ色まさる秋の夕暮

題しらず

暮かゝるむなしき空の秋をみておぼえずたまる袖の露かな

家に百首歌合し侍りけるに

ものおもはでかゝる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮

をのこども詩をつくりて歌にあはせ侍りしに

山路秋行といふことを　　前大僧正慈円

深山路やいつより秋の色ならん見ざりし雲の夕暮の空

題しらず　　寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり槙たつ山の秋の夕暮

西行法師

心なき身にもあはれはしられけり鴫たつ沢の秋の夕暮

西行法師すゝめて百首歌よませ侍りけるに

藤原定家

みわたせハ花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

五十首哥奉りし時

藤原雅経

たへてやハ思ありともいかゝせむ葎の宿の秋の夕くれ

秋の哥とてよみ侍ける

宮内卿

思ふ事さしてそれとハなき物を秋の夕へを心にそとふ

鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖ハあらしたゝ我からの露の夕暮

西行法師

おほつかな秋ハいかなる故のあれハすゝろに物のかなしかるらん

式子内親王

それなからむかしにもあらぬ秋風にいとゝなかめをしつのをたまき

題しらす

藤原長能

日晩の鳴夕くれそうかりけるいつもつきせぬ思ひなれとも

和泉式部

秋くれハときはの山の松風もうつるはかりに身にそしみける

曽祢好忠

秋風のよそに吹くる音羽山何の草木かのとけかるへき

相模

あかつきの露はなみたもとゝまらて恨る風の聲そのこれる

法性寺入道前関白太政大臣の家の哥合に

野風 藤原基俊

たかまとの野路のしのはら末さはきそゝや木枯けふ吹ぬなり

五百番哥合に 右衛門督通具

ふかくさの里の月影さひしさもすみこしまゝの野への秋風

五十首哥たてまつりし時杜間月といふ事を 皇太后宮大夫俊成

おほあらきの杜の木のまをもりかねて人たのめなる秋の夜の月

守覚法親王五十首よませ侍けるに 藤原家隆朝臣

あり明の月まつやとの袖のうへに人たのめなる宵のいなつま

摂政太政大臣家哥合に 藤原有家朝臣

風わたるあさちかすゑの露にたにやとりもはてぬ宵の稲妻

水無瀬にて十首哥たてまつりし時 左衛門督通光

むさし野やゆけとも秋のはてそなきいかなる風のすゑにふくらん

百首哥たてまつりし時月哥

前大僧正慈円

いつまてかなみたくもらて月ハみし秋まちえても秋そこひしき

式子内親王

なかめわひぬ秋よりほかのやともかな野にも山にも月やすむらん

題しらす　円融院御製

月影のはつ秋風とふけゆけハ心つくしにものをこそおもへ

三条院御製

足引の山のあなたにすむ人ハまたてや秋の月をみるらん

雲間微月といふことを

堀河院御製

しきしまやたかまと山の雲まよりひかりさしそふゆみはりの月

題不知　堀河院左大臣

今よりハ心のかきりなかめなん月ハたれともわかしものゆへ

橘為仲朝臣

あやなくもくもらぬ宵をいとふかなしのふの里の秋のよの月

法性寺入道前関白太政大臣

風ふけハ玉ちる萩の下つゆにはかなくやとる野への月哉

従三位頼政

こよひたれすゝふく風を身にしめて吉野のたけの月をみるらん

法性寺入道前関白太政大臣家に月歌あまた

よみ侍りける　大宰大弐重家

月みれはおもひそあへぬ山たかみいつれの年の雪にかあるらん

和哥所の哥合に湖辺月といふことを　藤原家隆

にほの海や月のひかりのうつろへは浪の花にも秋はみえけり

百首哥たてまつりし時秋の哥の中に　前大僧正慈円

更けゆかはけふりもあらし塩竈のうらみなはてそ秋の夜の月

題しらす　皇太后宮大夫俊成女

ことはりの秋にはあへぬなみたかな月のかつらもかはるひかりに

藤原家隆

なかめつつおもふもさひしひさかたの月のみやこのあけかたのそら

五十首哥たてまつりし時月前草花　摂政太政大臣

ふるさとのもとあらの小萩さきしよりよなよなにはの月そうつろふ

建仁元年三月尽日哥合に山家秋月といふことをよみ侍し

時しもあれふるさと人はおともせてみ山の月に秋風そ吹

八月十五夜和哥所哥合に深山月といふことを

ふかからぬと山のいほのねさめたにさそなこのまの月はさひしき

月前松風　寂蓮法師

月はなほもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風そ吹

鴨長明

なかむれはちゝにもの思ふ月に又わか身ひとつの峰の松風

山月といふことをよみ侍りける

藤原秀能

あし曳の山路の苔の露のうへにねさめ夜ふかき月をみるかな

八月十五夜和歌所歌合に海辺秋月と
いふことを

宮内卿

心あるをしまのあまのたもとかな月やとれとはぬれぬものから

宜秋門院丹後

わすれしな難波の秋のよはの空こと浦にすむ月はみるとも

鴨長明

松しまやしほくむあまの秋の袖月は物思ふならひのみかは

題しらす　七條院大納言

こととはむのしまかさきのあま衣浪と月とにいかゝしほるゝ

和歌所の歌合に海辺月を

藤原家隆

秋の夜の月やをしまのあまの原明かたちかき沖の釣舟

題しらす　前大僧正慈円

うきかよにちるかむすふかなにはかる心よくすむ秋のよの月

大江千里

いつくにかこよひの月のくもるへき小倉の山も名をやかふらん

源道済

心こそあくかれにけれ秋の夜のよふかき月をひとりみしまに

上東門院小少将

かはるらんころもてさむく秋の来る月やむかしのかけとみゆらん

和泉式部

きみめくる人もなき身を秋のよの月ゆへにこそおもひしらるれ
月をみてこそつらしける

藤原範永朝臣

みる人の袖をそしほる秋のよは月にいかなる影かそふらむ
色し

相模

ありあけのかけこそされ秋の月袖にうつれるわかなみたかな
永承四年内裏哥合に

大納言経信

月影のすみわたるかな天の原雲吹はらふよはのあらしに

題しらす

左衛門督通光

さき山葉はよわるの松かせを八雲よそへもとすむ山の月影

崇徳院に百首哥たてまつりける

左京大夫顕輔

秋風にたなひく雲のたえまよりもれ出る月の影のさやけさ

題しらす　　道因法師

山のはに雲のよこきる宵のまは出ても月そ猶またれける

殷富門院大輔

なかめつゝ今宵わかれていくよかは見む秋のよの月

式子内親王

よゐのまにさてもねぬへき月ならは山のはちかき物はおもはし

ふくるまてなかむれはこそかなしけれおもひもいれし秋のよの月

五十首歌たてまつりし時

摂政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

家にて三首よませ侍りけるに

月たにもなくさめかたき秋のよの心もしらぬ松の風かな

藤原家隆

さむしろや待夜の秋の風ふけて月をかたしくうちの橋姫

題しらす　　右大将忠経

秋の夜のなかきかひこそなかりけれまつにふけぬる有明の月

五十首歌たてまつりし時　野径月

摂政太政大臣

ゆくすゑは空もひとつのむさし野に草の原よりいつる月かけ

雨後月　　宮内卿

月をなほまつらん物か村雨のはれ行雲のすゑの里人

題しらす　　右衛門督通具

秋のよハ宿かる月も露なから袖にふきこせ荻の上風

源家長

秋の月しのにやとかる影たけて小さゝか原に露ふけにけり

元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月

といふ事を　　前太政大臣

風わたる山田の庵をもる月やほなみにむすふ氷なるらん

和歌所歌合に田家月といふ事を

前大僧正慈円

鴈のくるふしみの小田に夢さめてねぬよの庵に月をみるかな

皇太后宮大夫俊成女

稲葉ふく風にまかせてすむ庵ハ月そまことにもりあかしける

題しらす

大中臣定雅

あくかれてねぬよのちりのつもるまて月にはらハぬ床のさむしろ

崇徳院に百首歌たてまつりける

左京大夫顕輔

秋の田のかりねの床のいなむしろ月やとれともしける露かな

秋の田にいほさすしつ乃とまをあらみ月とゝもにやもりあかさん

百首哥たてまつりし秋の哥

式子内親王

秋の色はまかきにうとく成ゆけと手枕なれし閨の月影

秋乃哥の中に

太上天皇

秋の露や袂にいたくむすふらん長き夜あかすやとる月哉

千五百番哥合に

左衛門督通光

さらに又くれをたのめと明にけり月はつれなき秋のよの空

経房卿家哥合に暁月の心をよめる

二條院讃岐

大かたの秋のねさめの露けくは又誰か袖に有明の月

五十首哥たてまつりし時

藤原雅経

はらひかねさこそは露のしけからめやとるか月の袖のせはきに

新古今和歌集巻第五

秋哥下

和哥所にておのこともうたよみ侍しに夕の鹿と
いふことを　藤原家隆朝臣

したもみちかつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらむ

百首哥たてまつりし時　入道左大臣

山おろしに鹿の音たかくきこゆなりおのへの月にさ夜や深ぬる

題しらす　寂蓮法師

野わきせし小野の草ふしあれはてゝみ山にふかきさをしかの声

題しらす　俊恵法師

あらし吹まくすか原になく鹿ハうらみてのみや妻をこふらん

前中納言匡房

妻こふる鹿のたちとをたつぬれはさ山かすそに秋風そ吹

百首哥たてまつりし時秋の哥　惟明親王

み山への松のこすゑをわたるなりあらしにやとすさをしかの声

晩聞鹿といふことをよみ侍し　土御門内大臣

我ならぬ人もあはれやまさるらん鹿なく山の秋の夕くれ

百首哥たてまつりし　摂政太政大臣

たくへくる松のあらしやたゆむらん尾上にかへるさをしかのこゑ

千五百番哥合に　前大僧正慈円

なく鹿のこゑにめさめてしのふかなみはてぬ夢の秋のおもひを

家に哥合し侍りけるに鹿をよめる　権中納言俊成

末もとの萩もまに子鹿のなくなるに小萩か原の露そこほるゝ

題しらす　源道済

ねさめしてひさしくなりぬ秋のよはあけやしぬらん鹿そなくなる

西行法師

を山田乃庵ちかく鳴鹿のをとにおとろかされておとろかすかな

白河院鳥羽におはしましけるに田家秋興といへる事をよみ侍りける　中宮大夫師忠

山里のいなはの風にねさめして夜ふかく鹿のこゑをきくかな

郁芳門院の前栽合によみ侍ける　藤原顕綱朝臣

さをしかのいかにしらせてきつゝ野分のあとの葛のうら風

題しらす　俊恵法師

立田山梢まはらになるまゝにふかくも鹿のそよくなるかな

祐子内親王家にて哥合のはしの哥によみ侍りし

きりゝす

権大納言長家

とまらて秋のかたみをきりゝすのこゑのあはれくやなるらん

摂政太政大臣家百首歌合に

前大僧正慈円

やまてゐる庵さへ袖のまくらにハうきねよりかなしき秋の風つるゝ

題しらず

よみ人しらず

山田もるかりほにたつる霜のよハよるさへさむき秋のよなよな

前中納言匡房

秋くれハあさけの風の手をさむみ山田のひたをまかせてそきく

善滋為政

都にハさえてなかりし田をかりてみるしも秋のあはれなる

中納言家持

今よりハ秋風さむくなりぬへしいかてかひとりなかき夜をねん

人麿

秋されハ鴈の翅(はね)に霜ふりてさむきよさむく時雨さへふる

さを鹿のつまとふ山の岡へなる早田ハからし霜ハおくとも

貫之

刈てほす山田のいねハ袖ひちてうへし早苗とみえすも有哉

菅贈太政大臣

草葉にハ玉とみえてわひ人の袖のなみたの秋のしら露

中納言家持

わか宿の尾花か末にしら露のおきし日よりそ秋風も吹

恵慶法師

秋と云へ契置てやむすふらん浅ちか原のけさの白露

人麿

秋されハをく白露にわか宿の浅ちかうハ葉色つきにけり

天暦御哥

秋つる野にも山にも白露のかゝる重ハ思ひをとけて

後冷泉院のみこの宮と申ける時乃野花といふ心を

堀河左大臣

つゆしけき野へにならひてきり〳〵すわか手枕のしたに鳴也

閑庭露繁といふ事を

基俊

庭の花にまつる露はことよせて心のよそにしるをもる哉

白河院にて野草露繁といへる心を

をのこともつかうまつりけるに

贈左大臣長実

秋の野の草葉をしなみ置露にぬれてや人のたつね行らん

百首哥奉りし時　寂蓮法師

もの思ふ袖より露やならひけん秋風吹ハたへぬものとハ

秋の哥の中に　太上天皇

露は袖にものおもふころはさそなおくかならす秋のならひならねと

野原より露のゆかりをたつねきてわか衣手に秋風そ吹

題しらす　西行法師

蛬よさむに秋のなるまゝによはるか声のとほさかりゆく

守覚法親王五十首哥の中に　家隆朝臣

むしのねもなかき夜あかぬふるさとになほおもひそふ松風そ吹

百首哥の中に　式子内親王

跡もなき庭のあさちにむすほゝれ露のそこなる松むしのこゑ

題しらす　藤原頼忠朝臣（輔尹イ）

秋風は身にしむはかり吹にけり今やうつらん妹かさころも

前大僧正慈円

衣うつおとは枕にすかはらやふしみの夢をいくよのこしつ

千五百番哥合に秋哥　権中納言公経

衣うつみ山のいほのしはしはもしらぬ夢ちにむすふ手枕

和哥所哥合に月のもとに衣うつといふことを　摂政太政大臣

里はあれて月やあらぬとうらみてもたれあさちふに衣うつらん

宮内卿

まどろまでながめよとてのすさみかな麻のさ衣月にうつ声

千五百番歌合に　藤原定家

秋とだに忘れむと思ふ月影をさもあやにくに擣衣哉

擣衣を読侍ける　大納言経信

ふるさとに衣うつとは行雁や旅の空にも鳴てつぐらん

中納言兼輔家の屏風に　貫之

雁鳴て吹風さむみから衣君待がてにうたぬよぞなき

擣衣の心を　藤原雅経

みよしのの山の秋風さよ更てふるさとさむく衣うつなり

式子内親王

ちたびうつきぬたのをとに夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる

百首歌奉りし時

更にけり山のはちかく月さえてとをちの里に衣うつ声

九月十三夜月くまなく侍けるをながめあかしてよみ侍ける　道信朝臣

秋はつるさ夜更がたの月みれば袖ものこらず露ぞをきける

百首歌奉りし時

藤原定家

ひとりぬる山鳥のをのしたりをに霜おきまよふ床の月影

摂政太政大臣大将に侍ける時月哥五十首

よませ侍けるに　寂蓮法師

ひとめ見しのへのけしきはうらかれて露のよすかにやとる月かな

月歌とてよみ侍ける　大納言経信

秋の夜ハ衣さむしろかさねても月の光にしくものそなき

九月ついたちに　花山院御製

秋の夜ハはや長月になりにけりことわりなりやねさめせらるゝ

五十首哥たてまつりし時　寂蓮法師

むら雨の露もまたひぬまきの葉に霧たちのほる秋の夕くれ

秋の哥とて　太上天皇

さひしさハみ山の秋のあさくもり霧にしほるゝ槙の下露

河霧といふ事を　右衛門督通光

曙や川せの浪のたかせ舟くたすか人の袖乃秋霧

堀川院御時百首哥たてまつりける時霧

をよめる　権大納言公実

麓をハ宇治の川霧たちこめて雲ゐにみゆる朝日山かな

題しらす　　　　曽祢好忠

山里に霧のまかきのへたてすはをちかた人の袖もみてまし

清原深養父

鳴雁の音をのみそきく小倉山霧たちはるゝ時しなけれは

人丸

垣ほなる荻みたるよりも秋風の吹くなるなへに雁そ鳴なる

秋風に山とひこゆる雁かねのいやとをさかる雲かくれつゝ

凡河内躬恒

初雁の羽風すゝしくなるなへに誰か旅ねの衣かへさぬ

よみ人しらす

雁かねは風にきほひて過れとも我待人のことつてもなし

西行法師

よこ雲の風にわかるゝしのゝめに山とひこゆる初雁の声

白雲をつはさにかけて行雁の門田のおもの友したふなる

五十首歌奉りしに月前聞雁といふ
ことを

前大僧正慈円

大江山かたふく月の影さえてとはたの面に落る雁金

題しらす

朝恵法師

むら雲や雁の羽風にはれぬらん声きく空にすめる月影

皇太后宮大夫俊成女

吹まよふ雲ゐをわたる初雁の翼にならす四方の秋風

院に合し奉の中に山路秋行といへる事を　藤原家隆

秋風の袖に吹まくみねの雲を翼にかけて雁も鳴なり

五十首の歌よませ給ふし時菊籬月といへる心を　宮内卿

霜をまつ籬の菊のよひのまに置まよふ色は山の端の月

崇徳院の御時内裏にて菊をめてさせ給けるにれて歌よみ付侍ける　花園左大臣室

九重にうつろひぬとも菊の花もとの籬を思ひわするな

題しらず　権中納言定頼

今よりは又咲花もなきものをいたくなおきそ菊の上の露

暮行秋の心を　中務卿具平親王

秋風にしほるゝ野への花よりもむしのねいたくかれにけるかな

題しらず　大江嘉言

ねさめする袖さへさむく秋のよのあらし吹なり松虫のこゑ

千五百番歌合に　前大僧正慈円

秋をへてあはれもつゆもふかくさのさとゝふものはうつらなりけり

左衛門督通光

入日さすふもとの尾花うちなひきたか秋風にうつらなくらん

題しらす　皇太后宮大夫俊成女

あたにちる露の枕にふしわひてうつらなくなり床の山風

千五百番哥合に

とふ人もあらし吹そふ秋はきて木のはにうつむ宿の道しは

色かはる露をは袖にをきまよひうらかれてゆく野への秋かな

秋哥とて　太上天皇

秋更ぬなけや霜夜のきりきりすやゝかけさむしよもきふの月

百首哥奉りし時　摂政太政大臣

きりきりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ

千五百番哥合に　春宮権大夫公継

ねさめする長月の夜の床さむみけさふく風に霜やをくらん

和哥所にて六首哥つかうまつりし時秋哥

前大僧正慈円

秋ふかき淡路の島の有明にかたふく月を送る浦風

暮秋のこゝろを

長月もいく有明になりぬらん浅ちの月のいとゝさひゆく

摂政太政大臣大将に侍りける時百首哥よませ侍りし　寂蓮法師

龍の雲みけるに秋くれて表にも八霜やおきかはるらん
梢のもみぢぬらさるとて
中務卿具平親王
いつまでか紅葉をとめん山桜子の花のちるをとおしみて
紅葉まで遠方ともおもふらむ
高倉院御製
うれしきはみえしまの山の紅葉してあかぬかねとされしを紛
秋のよそてもみる
八條院高倉
神南備のみむろの梢いかならんなべての山も時雨するころ
最勝四天王院障子にすゞか川かきたる所
太上天皇
すゞか川ふかき木の葉に日数へて山田の原の時雨をぞきく
入道前関白右大臣家百首歌よみ
侍りけるに紅葉
皇太后宮大夫俊成
心とや紅葉はすらん立田山松は時雨にぬれぬものかは
大井川にまかりて紅葉を侍りけるに
藤原輔尹朝臣
杉まちるてそてるみやま紅葉せる嵐の山の梢なるらん
題しらず
曽禰好忠

入日さすをのへの[illegible]くもりなく[illegible]
百首奉りし時

宮内卿

立田山あらしや峰によはるらんわたらぬ水も錦たえけり

左大将に侍りける時家に百首歌合し侍りけるに
はゝそをよみ侍りける

摂政太政大臣

はゝそ原しつくも色やかはるらん杜の下草秋ふけにけり

定家朝臣

時わかぬ浪さへ色にいつみ川はゝその杜にあらし吹らし

障子の絵にあれたる宿に紅葉ちりたるところ
をよめる

俊頼朝臣

ふるさとはちるもみちはにうつもれて軒のしのふに秋風そ吹

百首奉りし秋歌

式子内親王

桐の葉もふみわけかたく成にけりかならす人をまつとなけれと

題しらす

曾禰好忠

人はこす風に木のはゝちりはてゝよな〳〵虫は声よはるなり

守覚法親王五十首歌よみ侍りけるに

春宮権大夫公継

紅葉ゝの色にまかせてときは木も風にうつろふ秋の山かな

家隆朝臣

露時雨もる山かけの下紅葉ぬるともをらん秋のかたみに

題しらす　西行法師

松にはふまさきのかつらちりにけりとやまの秋は風すさふらん

法性寺入道前関白太政大臣家十首歌合に　前参議親隆

うつろくかたのよそには紅葉ちらねとわきて秋風吹

百首歌奉りける時　二條院讃岐

ちりかゝる紅葉の色はふかけれとわたれはにこる山川の水

題しらす　柿本人麿

あすか川もみちはなかるかつらきの山の秋風吹そしぬらん

権中納言長方

飛鳥川せゝに浪よるくれなゐやかつらき山のこからしの風

なか月の比水無せに日ころ侍りけるにあらしの山の紅葉涙にたくふよし申つかはして侍りける人の返事に　権中納言公経

紅葉ゝをさこそあらしのはらふらめこの山本も雨とふるなり

家に百首歌合し侍りける時　摂政太政大臣

立田姫いまはのころの秋風に時雨をいそく人の袖かな

紅葉見にまかりてよみ侍ける

前大納言忠良

打むれて散紅葉をたつぬれは山路よりこそ秋はゆきけれ

津のくにゝ侍けるころ道済かもとにつかはしける

能因法師

夏草のかりそめにとてこしかとも難波の浦に秋そ暮ぬる

くれの秋おもふこと侍けるころ

かくしつゝくれぬる秋と老ぬれはしかすかに猶物そ悲しき

五十首よませ侍けるに

守覚法親王

身にかへていさゝは秋をおしみみむさらてももろき露の命を

閏九月盡の心を

前太政大臣

なへて世のおしさにそへておしむかな秋より後の秋のかきりを

新古今和歌集巻第六

冬哥

千五百番哥合に初冬の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

おきあかす秋のわかれの袖の露霜こそむすべ冬や来ぬらん

天暦御時神無月といふことをかみにおきて哥つかうまつりけるに

藤原高光

神な月風に紅葉のちる時はそこはかとなく物ぞかなしき

題しらず

源重之

名取川やなせの浪ぞさわぐなる紅葉やいとゞよりてせくらん

後冷泉院御時上のをのこども大井河にまかりて紅葉浮水といへる心をよみ侍りける

藤原資宗朝臣

筏士よまてこと問はむ水上はいかばかり吹山のあらしぞ

大納言経信

ちりかゝる紅葉流れぬ大井川いづれ井堰の水のしがらみ

大井川にまかりて落葉満水といへる心をよみ侍りける

藤原家経朝臣

高瀬舟しぶくばかりに紅葉葉の流れてくだる大井川かな

深山落葉といへる心を

俊頼朝臣

日暮るれはあふ人もなしまさきちる峰の嵐のをとはかりして

題不知　清輔朝臣

をのつからをとするものは庭の面に木葉吹まく谷の夕風

[illegible]

前大僧正慈円

木葉ちる宿にかたしく袖の色をありともしらてゆく嵐かな

右衛門督通光

木のはちる時雨やまかふわか袖にもろきなみたの色と見るまて

藤原雅経

うつりゆく雲にあらしの声す也ちるかまさきのかつらきの山

七条院大納言

はつ時雨しのふの山の紅葉をあらし吹とはそめすや有けん

信濃

しくれつゝ袖もほしあへすあしひきの山の木葉にあらし吹比

藤原秀能

山里の風すさましき夕暮に木葉みたれて物そかなしき

祝部成茂

冬のきて山もあらはに木葉ふり残る松さへ峰にさひしき

五十首哥たてまつりし時　宮内卿

かくてすむ秋のかたみや立田山ちるをまたぬ峯の嵐哉

頼輔卿家に哥合し落葉の心を

藤原資隆朝臣

時雨かときけは木の葉のふるものをそれにもぬるゝわか袂哉

法眼兼寿

ときしもあれ冬八葉守の神な月まはらになりぬ森の柏木

津守国基

いつのまに空のけしきのかはるらむはけしきけさの木からしの風

西行法師

月をまつたかねの雲八晴にけり心あるへき初時雨哉

前大僧正覚忠

神な月木々のこのはゝちりはてゝ庭にそ風のおとはきこゆる

清輔朝臣

柴の戸に入日のかけはさしなからいかにしくるゝ山辺なるらん

山家時雨といふ心を

藤原隆信朝臣

雲晴て後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松の下露

寛平御時きさいの宮の哥合に

よみ人しらす

神な月時雨ふるらしさほ山のまさきのかつら色まさりゆく

題しらす　　中務卿具平親王

木枯のおとに時雨をきゝわかて紅葉にぬるゝ袂とそみる

中納言兼輔

時雨ふるおとハすれともくれ竹のなとよとゝもに色もかはらぬ

十月ハかりときはの杜をすくとて　　能因法師

しくれの雨そめかねてけり山しろのときはの杜のまきの下葉は

題不知　　清原元輔

冬をあさみまたき時雨とおもひしをたえさりけりな老の涙も

後白河院御哥

まはらなる柴の庵に旅ねして時雨にぬるゝさよ衣かな

ことしれを　　前大僧正慈円

やよ時雨ものおもふ袖のなかりせハ木のはの後になにをそめまし

冬の哥の中に　　太上天皇

ふかみとりあらそひかねていかならむまなく時雨のふるの神杉

題不知　　人麿

時雨の雨まなくしふれハまきの葉もあらそひかねて色付にけり

和泉式部

世中に猶もふるかな時雨ハ雲まの月のいてやと思へハ

百首歌たてまつりし時　　二条院讃岐

をりこそあれなかめにかゝるうき雲の袖もひとつにうち時雨つゝ

題しらす　　西行法師

秋篠やとやまの里やしくるらんいこまのたけに雲のかゝれる

道因法師

はれくもる時雨はさためなき物をふりはてぬるはわか身なりけり

千五百番歌合に　　源具親

いまはまたちらてもまかふ時雨かなひとりふりゆく庭の松風

題しらす　　俊恵法師

みよしのゝ山かきくもり雪ふれはふもとの里はうち時雨つゝ

入道左大臣

まきの屋に時雨の音のかはるかな紅葉やふかくちりつもるらん

千五百番歌合に　　二条院讃岐

世にふるはくるしき物をまきの屋にやすくも過る初時雨かな

題しらす　　源信明朝臣

ほの〴〵と有明の月の月かけに紅葉吹おろす山おろしの風

中務卿具平親王

紅葉をゝ何おしみけん木のまよりもりくる月ハ今宵こそみれ

宜秋門院丹後

吹はらふ嵐の後の高ねより木のはくもらて月やいつらん

春日社歌合に暁月といふことを

右衛門督通具

霜こほる袖にも影はのこりけり露よりなれしありあけの月

和歌所にて六首歌たてまつりしに冬歌

藤原家隆朝臣

なかめつゝいくたひ袖にくもるらん時雨にふくるありあけの月

題しらす

源泰光

さためなくしくるゝ空のむら雲にいくたひおなし月を待らん

千五百番歌合に

源具親

今よりハ木葉かくれもなけれとも時雨にのこるむら雲の月

たいしらす

たえくもりけるおちにさえ／＼てさゆるをてらす山のはの月

冬の歌とてよめる　寂蓮法師

たえ／＼に里わく月のひかりかな時雨をおくるよはのむら雲

雨後冬月といへることを

良暹法師

今はとてねなましものを時雨つる空ともみえすすめる月かな

題不知　　曾祢好忠

露霜のよはにおきゐて冬のよの月みるほとに袖はこほりぬ

前大僧正慈円

紅葉ハおのかそめたる色そかしよそけにおけるけさの霜かな

西行法師

小倉山ふもとの里に木葉ちれは梢にはれて月をみるかな

五十首哥奉りし時　　雅経

秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらに木からしの風

題しらす　　式子内親王

風さむみ木の葉はれゆくよな〳〵にのこるくまなき庭の月影

殷富門院大輔

我門のかりたのおもにふす鴫の床あらはなる冬のよの月

清輔朝臣

冬かれの森のくち葉の霜のうへにおちたる月の影のさやけさ

千五百番哥合に　　皇太后宮大夫俊成女

はしわたえてさむる梢に影されは霜かすむ空のよの月

左衛門督通具

霜むすふ袖のかたしきうちとけてねぬよの月の影そさむけき

五十首哥奉りし時　　藤原雅経

影とめし露のやとりを思ひ出て霜にあととふ浅茅生の月

枯野霜といふことをよみ侍ける
法印幸清
かたしきの袖をや霜にかさぬらん月に夜かるゝくらしの枯原
題しらす
源重之
夜をさむみ萩のはすゑは枯よそらあれぬる影にや有らん
道信朝臣
小夜更てこゑさむきあしたつの幾重の霜か置まさるらん
冬の歌の中に
太上天皇
冬の夜のなかきをおくる袖ぬれぬ暁かたのよものあらしに
[illegible]
摂政太政大臣
篠の葉はみ山もさやにうちそよき氷れる霜を吹あらしかな
[illegible]
清輔朝臣
[illegible]
皇太后宮大夫俊成女
霜かるゝはそこともみえぬ草の原たれにとはまし秋の名残を
百首歌の中に
前大僧正慈円
霜さゆる山田のくろのむら薄かる人なしにのこるころかな
題しらす
好忠
草のうへにこゝら玉ゐし白露を下葉の霜とむすふ冬かな

中納言兼輔

かさしのたせる袂にさく菊の花さかりて今日も八千代へまろ

うへのをとこ共菊あはせし侍けるに

延喜御製

時雨つゝかれ行野への花なれと霜の籬にゝほふ色かな

延喜十四年尚侍藤原満子に菊宴たまはせける時

中納言兼輔

菊の花手折ては見し初霜のおきなからこそ色まさりけれ

行幸の時大井河に行幸侍ける日

坂上是則

影さへやいまはと菊のうつろふは浪の底にも霜やおくらん

題しらす

和泉式部

野へ見れハお花かもとの思草かれ行冬になりそしにける

西行法師

津の国の難波の春ハ夢なれや芦のかれ葉に風わたるなり

守覚法親王五十首哥よませ侍ける時

大納言成通

冬ふかくなりにけらしな難波江の青葉ましらぬ芦のむら立

題しらす

西行法師

さひしさにたへたる人の又もあれな庵ならへん冬の山里

あはせ侍ける時家ゝの人ゝによみつかはしける

康資王母

東路のみちの冬草しげりあひて跡だにみえぬ忘水かな

冬歌とて讀侍ける

守覚法親王

むかし思ふさよのねざめの床さえて涙もこほる袖の上かな

るとよみ侍りける時

たちのぼる山のをりくもたえて花のちるらん

題しらず

皇太后宮大夫俊成

かはるらん月さえてくる山川のたえまはむすぶあさ氷かな

摂政太政大臣

消えかへり岩まにまよふ水の泡のしばしやどかる薄氷かな

枕にも袖にも涙つらゝゐてむすばぬ夢をとふ嵐かな

冬歌とてよみ侍りける時

みよしのやさえておほるにはまよはる陰のころしら流

るとてよみ侍りて

かぞへての袖みやこもさえわたれはわかおもひよ

家隆に天之院乃詠まはしきとこ

ところ

太上天皇

桜咲く花さかりたる侍来むすばぬ流の曙

前大僧正慈円

あしろ木にいさよふ浪の音ふけてひとりやねぬる宇治の橋姫

式子内親王

見るまゝに冬ハきにけり鴨のゐる入江の汀うすこほりつゝ

摂政太政大臣家歌合に湖上冬月

藤原家隆朝臣

しかのうらや遠さかりゆく浪間よりこほりて出る有明の月

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

独みる池の氷にすむ月のやかて袖にもうつりぬるかな

題しらす

山辺赤人

うはたまの夜のふけゆけハ楸おふるきよき河原に千鳥なく也

さほの河原に千鳥なくなりともよみ侍る

伊勢大輔

夕されハ[illegible]ともまとはせる[illegible]

みちのくにまかりける時よみ侍ける

能因法師

夕されハ塩風こしてみちのくのゝたの玉川千鳥なくなり

題不知

重之

白浪にはねうちかはしはま千鳥かなしき物ハよハの一こゑ

後徳大寺左大臣

ゆふなきにとわたる千鳥なみまよりみゆるこしまの雲にきえぬる

堀河院にて百首哥たてまつりし

祐子内親王家紀伊

浦風に吹上のはまのはま千鳥なみたちくらし夜はになくなり

五十首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

月そすむたれかはこゝにきのくにや吹上の千鳥ひとりなくなり

千五百番哥合に

正三位季能

さよ千鳥こゑこそちかくなるみかたかたふく月にしほやみつらん

最勝四天王院の障子になるみの浦かきたるところ

藤原秀能

風ふけはよそになるみのかたおもひおもはぬ浪になく千鳥かな

権大納言通光

浦人の日もゆふくれになるみかたかへる袖より千鳥なくなり

文治六年女御入内屏風に

正三位季経

風さゆるとしまかいその村千鳥たちゐは浪の心なりけり

五十首哥たてまつりし時

藤原雅経

くるゝやさくら来春の初雪にねつかはやまつ松の枝は
堀河院にて冬をよみ侍りし　河内
氷ゐるの夕のやまねみつきるゝ涙の枕にて上へぬとし
題しらす　湯原王
吉野なるなつみの河の川淀に鴨そなくなる山かけにして
能因法師
ねやの上にかたえさしおほひそともなるはひろかしはにあられふるなり
法性寺入道前関白太政大臣
さゝ浪やしかのから崎風さえてひらのたかねにあられふるなり
人麿
やたのゝにあさちいろつくあらち山みねのあは雪さむくそあるらし
雪の朝基俊か許へつかはしける　瞻西上人
つねよりもしのやの軒そうつもるゝけふは都に初雪やふる
返し　基俊
降雪にまことにしのやいかならんけふは都にあとたにもなし
冬乃哥あまたよみ侍りけるに　権中納言長方
初雪のふるの神杉うつもれてしめゆふ野への冬こもりせり

思ふこと侍りけるころ人々雪の歌よみ侍りける日

[illegible]

[illegible]

入道前関白太政大臣に侍りける時家に人々歌よみ侍りけるに

雪をよめる　寂蓮法師

降るまゝにまさきの待遠る深山の里の雪[illegible]

雪のあした後徳大寺左大臣のもとにつかはしける　皇太后宮大夫俊成

けふはもし君もやとふとなかむれとまた跡もなき庭の雪かな

返し　後徳大寺左大臣

いまそきく心ハ跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれとも

題しらす　前大納言忠良

しら山に年ふる雪やつもるらん夜半にかたしく袂さゆなり

東路国雪といふ事を　刑部卿範兼

[illegible]

[illegible]　高倉院御哥

吉野山やみにまよひし雪をはらひつゝのこゑもれ
紅葉のちりしきたるうへに雪のふりかゝりて侍
きたるを見て上東門院に侍りける女房につかは
しける
藤原家隆朝臣
山里は道もや見えん[illegible]紅葉しも雪の降ぬら
野亭雪を読侍ける
藤原国房
さびしさをいかにせよとて岡べなる楢の葉しだり雪の降
るらむ
定家朝臣
駒とめて袖うちはらふかげもなしさのゝわたりの雪の夕暮
摂政太政大臣大納言に侍りける時山家
雪といふ事をよませ侍ける
待人のふもとの道は絶ぬらん軒端の杉に雪おもるら
なり[illegible]
よませ侍りける[illegible]の雪を
藤原有家朝臣
夢かよふ道さへたえぬくれ竹の伏見の里の雪の下折
[illegible]よませ侍けるに
入道前関白太政大臣
ふる雪にたくもの煙かきたえてさびしくもあるか塩竈の浦

題しらす　赤人

田子のうらにうち出てみれは白妙のふしの高ねに雪はふりつゝ

延喜御時哥奉れとおほせられけれは

貫之

雪のみやふりぬとは思ふ山さとにわれもおほくの年そつもれる

守覚法親王五十首哥よませ侍けるに

皇太后宮大夫俊成

雪ふれは峯のま榊うつもれて月にみかける天のかく山

小侍従

かきくもりあまきる雪のふるさとをつもらぬさきにとふ人もかな

前大僧正慈円

庭の雪にわか跡つけて出つるをとはれにけりと人やみるらん

なかむれはわか山のはに雪しろし都の人よあはれともみよ

曽祢好忠

冬草のかれにし人のいまさらに雪ふみわけてみえんものかは

雪の朝大原にてよみ侍ける

寂然法師

たつねきて道わけわふる人もあらしいくへもつもれ庭の白雪

百首哥の中に

太上天皇

このころは花も紅葉も枝になししはしなきえそ松のしら雪

後法性寺家に十首哥よみ侍りけるに年の暮の心を

俊恵法師

歎つゝことしも暮ぬ露の命いけるはかりを思ひ出にして

百首哥奉りし時

小侍従

思ひやれ八そちの年の暮なれはいかはかりかハ物ハ悲しき

題しらす

西行法師

むかし思ふ庭にうき木をつみおきて見し世にも似ぬ年の暮かな

摂政太政大臣

礒のかみふるのゝ小篠霜をへて一夜はかりに残る年かな

前大僧正慈円

年の明てうき世の夢のさむへくハ暮るゝ今日ハいとはさらまし

権律師隆聖

朝ことにあか井の水に年くれて我よのほとのくまれぬる哉

百首哥奉りし時

入道左大臣

いそかれぬ年の暮こそあはれなれむかしハよそに聞し春かハ

としのくれに身のおいぬることをなけきてよみ侍ける

和泉式部

かそふれハ年の残もなかりけり老ぬるはかりかなしきハなし

入道前関白百首哥よませ侍ける時年の暮

心をよみてつかはしける

後徳大寺左大臣

あらたまる世に関守はなけれとも年の暮にはとまらさりけれ

太神宮内宮にて歳暮といふこゝろを
人々よみける　藤原有家朝臣

ゆくとしをさそふよの海にわれもひかれて神に流やせし

寂蓮法師

老の浪よせくる年のくれことに今八十の松山

千五百番歌合に　右衛門督通光

春しきりことよせてまたもとなき梅の花のうつる
ころ歌めしけるに　家隆朝臣

人のよするかのこゝみよせてまたわか海やまにほけても

内大臣に侍ける時家の歌合に
法性寺入道前関白太政大臣

風すさふとものかやをあまてしのゝにまよひつゝ

京極関白前太政大臣高陽院歌合に
前中納言匡房

風吹はくものかけさへよそにしてとるやともしにおかれて

霧といふことをよみ侍ける
左近中将公衡

秋のよのあはれはまさてよ門の月をみるかな

懐旧の心をよみ侍ける
権僧正永縁

中々にきえハ消なてはかなのいのそこにこそ[illegible]
あるこそあるかなし時

式子内親王

日数ふる雪けにまさる炭竃の烟もさひし大原の里

歳の暮に人につかはしける　西行法師

あのつからいはぬをしたふ人やあるとやすらふ程に年の暮ぬる

としの暮によみ侍ける　上西門院兵衛

かへりてハ身にそふものとしりなから暮行年を何したふらん

皇太后宮大夫俊成女

隔てゆく世々の面影かきくらし雪とふりぬる年の暮哉

大納言隆季

あたらしき年やわか身をとめくらん隙行駒に道をまかせて

千五百番哥合に　皇太后宮大夫俊成

けふ毎にけふやかきりとおしめとも又もことしにあひにけるかな

新古今和歌集巻第七

賀歌

みつき物ゆるされて国とめるを御覧して

仁徳天皇御歌

たかき屋にのほりて見れは煙たつ民のかまとはにきはひにけり

題しらす　よみ人しらす

はつ春のはつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉の緒

子日をよめる　藤原清正

子日してしめつる野への姫小松ひかてや千代のかけをまたまし

題しらす　興風

君か代のとしのかすをはしろたへの浜のまさこと誰かしきけむ

亭子院の六十御賀屏風に若なつめる所をよみ侍りける　貫之

わかなおふる野へといふ野へを君かため万代しめてつまむとそ思ふ

延喜御時屏風に

ゆきとしのちとせをかけて見る菊の色あさみのかすはかつまさる

祐子内親王家にて桜を　土御門右大臣

君か代にあふへき春のおほけれはちるとも桜あくまてそ見む

七條后宮の五十賀屏風に

伊勢
住の江の浜のまさこをふむたつハ久しき跡をとむるなりけり
延喜御時屏風哥　貫之
年ことにおひそふ竹のよゝをへてかはらぬ色を誰とかはみむ
題しらす　躬恒
千とせふる尾上の松ハ秋風のこゑこそかはれ色ハかはらす
興風
山川の菊のした水いかなれは流て人の老をせくらん
延喜御時屏風哥　貫之
いのりつゝ猶長月の菊の花いつれの秋かうへてみさらん

文治六年女御入内屏風哥
皇太后宮大夫俊成
山人の折る袖にほふ菊の露うちはらふにも千世ハへぬへし
貞信公家屏風に　清原元輔
神な月もみちもしらぬときは木に万代かゝれ峯のしら雲
題不知　伊勢
山風ハふけとふかねとしら浪のよする岩根ハ久しかりけり
後一条院むまれさせ給ひての九月月くまなかりける夜大二条関白中将に侍りける時若き人々さそひ出てて池の舟にのせて中島の

松はさしも久しき程をとほしくこそ侍られは

紫式部

くもりなくちとせにすめる水の面にやとれる月の影ものとけし

永承四年内裏の哥合に池水といふ心を

伊勢大輔

池水のよゝに久しくすみぬれは底の玉もゝ光見えけり

後冷泉院の大嘗会の御禊に日ころ雨ふりてその日になりて空はれて侍りけれは紀伊典侍
みやりける

六条右大臣

君か代のちとせの数もかくれなくくもらぬ空の光にそみる

天喜四年皇后宮の哥合に祝の心をよみ侍りける

前大納言隆国

すみのえにおひそふ松の枝ことに君かちとせの数そこもれる

寛治八年関白前太政大臣高陽院の哥合に祝の心を

康資王母

万代を松の尾山のかけしけみ君をそいのるときはかきはに

後冷泉院おさなくおはしましける時卯杖の松を人の子にたまはせけるによみ侍りける

大弐三位

あひおひのをしほの山の小松はらいまより千代のかけをまたなん

永保四年内裏子日に

大納言経信

ねのひするみかきのうちの小松原千代をはほかのものとやはみる

権中納言通俊

子日する野辺に小松をうつしうへて年のをなかく君そひくへき

寛治三年内裏の歌会に祝のこゝろをよみ侍ける

前中納言匡房

君か代はひさしかるへしわたらひやいすゝの川のなかれたえせて

題しらす

読人しらす

ときはなる松にかゝれる苔なれは年のをなかきしるへとそ思

二条院御時花有喜色といふ心を人々つかうまつりけるに

刑部卿範兼

君か代にあへるは誰もうれしきを花はいろにもいてにけるかな

おなし御時南殿の花のさかりに哥よめとおほせられけれは

参河内侍

身にかへて花もおしまし君か代にみるへき春のかきりなけれは

百首哥たてまつりし時

式子内親王

あめのしためくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御代の末々

京極殿にてはしめて人々哥つかうまつりけるに

松有春色といふ事をよみ侍し

京極殿にてはしめて詩哥講せられけ
るに哥たてまつりし時
摂政太政大臣
しきしまややまとしまねも神代より君かためとやかためをきけん
千五百番の哥合に
ぬれてほすたまくしのはの露霜に天てるひかりいく代へぬらん
祝の心をよみ侍りける
皇太后宮大夫俊成
君か代は千代ともさゝし天のとやいつる月日のかきりなけれは
千五百番哥合に
藤原定家朝臣
我みちをまもらは君をまもるらんよはひはゆつれ住吉の松

八月十五夜和哥所の哥合に月多秋友と
いふことをよみ侍りて
寂蓮法師
たかさこのまつもむかしになりぬへし猶ゆくすゑは秋のよの月
和哥所の開闔にてはしめてまいりし日
奏し侍りし
源家長
もしほ草かくともつきし君か代のかすによみをくわかのうら波
建久七年入道前関白太政大臣宇治にて人〻
に哥よませ侍りけるに
前大納言隆房
うれしさやかたしく袖につゝむらんけふまちえたる宇治の橋姫

嘉應元年入道前関白太政大臣家にて
川水久澄といふことを人々によませ侍りし
藤原清輔朝臣
年へたる宇治の橋守こととはむいくよになりぬ水のみなかみ
日吉禰宜成仲七十賀し侍りけるにつかはしけ
れ
なゝそちにみつの濱松老ぬれと千代のあまりはなほそはるけ
るとて奇よみ侍ける
後徳大寺左大臣
やほかゆくはまのまさこをきみか代のかすにとらなむおきつしまもる

家に哥合し侍りけるにきみのいはひの心を
よみ侍ける　　摂政太政大臣
春日山都の南しかそ思ふ北の藤なみ春にあへとは
天暦御時大嘗會主基備中國中山
よみ人しらす
ときはなるきひの中山おしなへてちとせをまつのふかき色哉
長和五年大嘗會悠紀方風俗近江國
朝日郷　　祭主輔親
あかねさす朝日の里のひかけ草とよのあかりのかさしなるへし
永承元年大嘗會悠紀方屏風近江

国ちか山をよめる　式部大輔資業

ときはなるとしはかはる山の山人今はし山のふもとね

寛治二年大嘗会屛風にたかのを山をよめる　権中納言匡房

とやかへるたかのを山の玉椿霜をはふともいろはかはらし

久寿二年大嘗会悠紀方屛風に近江国かゝみ山をよめる　宮内卿永範

くもりなきかゝみの山の月をみてあきらけき世をそらにしるかな

平治元年大嘗会主基方自参入音

おほ生野をよめる　刑部卿範兼

たかい山そのまゝをみ道ある世ゝもおほえてきかな

仁安元年大嘗会悠紀方にてよみてまつる

稲春哥　皇太后宮大夫俊成

あふみのやさかたのいねをかけつみて道あるみ代のはしめにそつく

寿永元年大嘗会主基方稲春哥丹波国長田村をよめる　権中納言兼光

神代よりけふのためとや八束穂に長田のいねのしなひそめけん

元暦元年大嘗会悠紀方哥ちゝね山

きよれハまつ涼しくや水無の山乃松の夕風

建久九年大嘗會主基屏風六月松井

ときハなる松井のみつをむすふ手のしつくことに千代はみえけれ

新古今和歌集巻第八

哀傷歌

題不知　　僧正遍昭

末の露もとのしつくや世中のおくれさきたつためしなるらん

小野小町

あはれなりわか身のはてやあさみとりつゐには野への霞と思へは

醍醐の御門かくれ給ひてのちやよひのつこもりに三條右大臣につかはしける

中納言兼輔

桜ちる春の末にはなりにけりあままもしらぬなかめせしまに

正暦二年諒闇の人ゝ梅乃枝につけて道信朝
臣につかはしける　実方朝臣
墨染のこひうけ世の花さかりおりわすれてもおりてけるかな
返し　道信朝臣
あかさりし花をやはるもこひつらん有し昔を思ひ出つゝ
やよひの比人をくれてたちけける人のもと
へつかはしける　仲正法師
花はくるゝはるさきにてあらまし歌のはなを思ひそ堂
人のはくるゝとも人をまさてうのくみせ日よりなく
こゝろはまとふ人のこゝはしめてなきまさる哉て

大納言
花みんと人をまちなき宿の梢をこゝろのうちにさそふ
としころとたのみ侍るをのこのまうてきて侍中
なりたてゝたち出さとよこゝろさしたてよみ
侍ける
右京大夫顕輔
まちみる花の歌をおもひて秋をまちて秋の山
太宰帥に母みまかりてのちみ侍法金剛院
の花をみて　後徳大寺左大臣
花みてはいとゝゆかしくなるものを人のこゝろも
宮内卿にて母のたちひて侍くさきのくれく

つかはしける　　摂政太政大臣

[illegible]のかはらぬ[illegible]

前大納言忠頼[illegible]

[illegible]とかくして[illegible]侍るに

前太政大臣[illegible]

[illegible]のかゝる[illegible]の

大納言摂政かくれ侍てのち人々をまかせて侍る

牡丹のさきて侍るをたてまつるとて菩提の[illegible]

つかはし侍りける　太宰大弐重家

[illegible]人とて[illegible]けるの[illegible]のうち[illegible]

たまさかにこのよはけふかきりとおもはまし[illegible]

[illegible]侍りける　[illegible]

あやめ草[illegible]のあと[illegible]の[illegible]

とけくま侍るころ五月五日人のもとへ

つかはしける　上西門院兵衛

はかなくもあやめもしらぬ袂かなむかしをこふるねのみなかれて

近衛院かくれ給ひにける[illegible]後

五月五日皇嘉門院に奉るとてよみ侍りける

九條院

あやめ草引人もなき[illegible]かくやおもはる

返し　　　　陽明門院

さもこそは秋のこゝろにあかぬわかれなれはてはけに

すみ侍りけるのちくたりけるよし藤原

為頼朝臣まうてきたりけるにつかはし

ける　　　小野宮右大臣

よそにのみおなし人なからかつ（？）はしらとおもへは

返し　　　藤原為頼朝臣

むかしをもおもひいてゝ人の心のうちやしるらん

小式部内侍うせてのちさふらひけるに

わきまへすなりにてまかりてのち

上東門院よりかさねてつかはさせ給ひけるにて

まいりて　　　和泉式部

ことしけき世をのかれて後人をしのひ

御返事　　　上東門院

思ふとも神の人の露をも知らぬ人のあとは

白川院御時中宮おはしましてのちその御方

にさふらひて侍りける七月ばかりに人の

露とて侍りけるを　　周防内侍

清原元輔まうてたるを見とゝめて

一品資子内親王に申してむかしのことなと

いらしてよみ侍ける　[illegible]御子女王

袖にさへ秋の夕ハしられけりきえし浅ちか露をかけつゝ

思ひいるゝぬこともなくるてハくもりたる

たかれもさらは上東門院中宮と申しける時

つかはしける　一条院御哥

秋風の露のやとりに君をおきてちりを出ぬることそかなしけ

秋のころおさなきこにをくれたる人に

大弐三位

わかれけんなこりの袖もかはかぬにをきやそふらん秋の夕露

をし　よみ人しらす

なけゝるよる夢ともしらすかなしさに滅しのえも浮流や

廉義公の母なくなりてのちもみちを見て

清慎公

をとなてみるこゝろもありしなやといつむかしの秋を恋しき

弾正尹為尊親王にをくれてなけき侍ける

ころ　和泉式部

ねさめする身をふきとをす風のをとをむかしハ袖のよそにきゝけん

従一位源師子かくれ侍て宇治より新

少将のもとにつかはしける

知足院入道前関白太政大臣

袖ぬれし萩の心ハ昔より[illegible]

法輪にまうで侍るとてさがのに大納言忠
家か墓の侍りけるほとりにまかりてよみ侍る

権中納言俊忠

さらでだに露けきさがの野べにきて昔のあとにしほれぬるかな

公時の母身まかりてなげき侍りけるころ大納
言実国がもとに申つかはしける

後徳大寺左大臣

かなしさハ秋のさがのゝきり〴〵すなをふるさとにねをやなくらん

母のみまかりにけるをさがのあたりにおさめ
侍る夜よみ侍ける

皇太后宮大夫俊成女

今ハさはうき世のさがの野べをこそ露きえはてし跡としのばめ

母身まかりにける秋野分しける日もとすみ
侍りけるところにまかりて

藤原定家朝臣

玉ゆらの露も涙もとゞまらずなき人こふるやどの秋風

父身まかりての秋寄風懐旧と云
ことをよみ侍し

藤原秀能

露をだに今ハかた見の藤衣あだにも袖を吹あらしかな

入道内大臣家百首よませて侍りけるとしの秋
右御門内大臣中納言に侍りけるにつかはしける
殷富門院大輔
秋ふかきねさめにいかゝ思ひいつるはかなくみえし春のよの夢
返し
右御門内大臣
見し夢をわするゝ時はなけれとも秋のねさめはけにそかなしき
さのひてもやけるすまゐてのちその家を
とほりてよみ侍りける
大納言実家
ちれ秋のすまゐとこはなれぬる心の庭の露そ消てし
こゝのくさまておけつ露中よめる人さ侮
あるつかさ侍りけるとき侍りけれはこれなむ
中将のつかさをもすゝみ侍りけれは中将とさい
これの人とも侍りけれは宣旨ねたのこ
ところしらせけるみよそて霜のれ乃
まてみのてみやまてわかれの歌
おほ侍りけれを　西行法師
わりなくもねの花をうさとおほえておなしき頃の
同行なりける人うらつて了けれくなりにけれ
前大僧正慈円
世なれてよめる

たてるとこす涙やひまをゆく夜たつけ山の道芝のつゆ
母のおもひに侍ける秋法輪にこもりてあら
しのいたく吹けれハ　皇太后宮大夫俊成
うき世にハ今ハあらしの山風にこれやなれゆくはしめなるらん
定家朝臣母身まかりてのち秋ころ墓
所近き堂にとまりてよみ侍ける
まれにくる夜半もかなしき松風をたえすや苔の下にきくらん
堀川院かくれ給てのち神無月風のおと
あはれにきこえけれハ　久我太政大臣
ものおもへはいろなき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに
藤原定通身まかりてのち月あかゝりける夜人
のゆめに殿上になむ侍るとてよみける
ふるさとをわかれし秋をかそふれハやとせになりぬありあけの月
源為善朝臣身まかりにける又のとしの秋月
をみて　能因法師
命あれハことし秋も月ハ見つわかれし人にあふよなき哉
世の中はかなく人〻おほくなくなり侍けるころ
中将宣方朝臣十月はかりに白河
の家にまかりたりけるに紅葉のひとはのこ
れるを見て侍て　前大納言公任

冬こもりてやまのしら雲みえぬ今ハなつかしねは
十月ころしみるせし侍ころ前大僧正慈
円のもとへわまてこれのあるときつかハして
すのやうの神な月しくれの月あらしよ
ゝてつかハし侍ける

太上天皇

思ひやれさそなしくれの夕暮もすきにしかたのやまを恋ひん
色し　前大僧正慈円

さためなきしくれときくそたもとぬる夕暮
雨中すきしくるとそ

太上天皇

ちる人のかみのすまゐのさそな夕の雨にぬれてみぬと
枇杷の皇太后宮かくれ給ては十月ころ
しかの宮にみ人しのけしけれはなさけありてさし
をきせける

相模

神な月しくるゝころもいかなれやすきにし秋の宮人
前大納言通房かまかりてのちこのころひさし
ひて侍けるあすきなたんしてよみ侍ける

土御門右大臣女

てをまきしのふ袖とみしものをあさつまはかりはちるらん

后宮菖蒲のねとゝもに帝の御世院へわきまゐる

さうしなとゝ侍て　馬内侍

しぬてもなほきみかためにあやめ草ねもしのはれて時分

色し　女御徽子女王

いにしへのなきになかるゝ水くきのあとこそ袖のうらによりけれ

恒徳公かくれてのち女のもとに月あかき夜

しのひてまかりてよみ侍りける

道信朝臣

ほしもあへぬ衣のやみにくらされて月ともいはすまとひぬるかな（わかな）

入道摂政のために万燈会おこなはれ侍りけるに

東三条院

水底にちゝのひかりはうつれともむかしのかけはみえすそありける

右忠朝臣身まかりにけるころよみ侍りける

源信明朝臣

よそのことゝおもひねさめの袖にハ涙のこほれぬおもひかな

一条院かくれ給てのちそのことゝもはてゝ

るけ給ひて夏よるのことゝもおほしいてゝ（え）

上東門院

逢事も今ハなきねの夢ならていつかハ君を又ハ見るへき

後朱雀院かくれ給て上東門院白河にうつりおはしましける

みまかりとすて　　藤原生子 大二条関白女

うしとてはむかれぬるとおもふらむとちてまわか世のきん

なきかなけるこのかきりもなし　　源道済

人ありとみすまいりし浜のあかつきのあとをまきとむは

後一条院中宮かくれ給てのち人の夢に

ちとせゆく人まれつきやしなれ山路にまよふと

小野宮太政大臣まうらねとすてよみ

権大納言長家

むかしのかけはなかなかひく人をはやれは露まよひなむかぬ

小式部内侍身まかりてのちつねにもちて侍

りける手箱を誦経にせさせ侍るとてよみ

侍ける　　和泉式部

恋わふときくにたにきけ鐘の音にうちわすらるゝ時のまそなき

上東門院中宮と申ける時の御方にまゐりてのちつねにうち

とけて侍りけるをのゝちの中に侍まうりを

人おもてかゝへのおはしますをとはかりける

紫式部

かゝ世にあるみてみし書きにし消え消えせ行みちなき

　　加賀左衛門

なし

ちゝ今はのさうし[illegible]のおもてハおとゝのわかきを
僧正明尊かもとにつかはしてはへるを[illegible]
[illegible]てまかりて[illegible]
さ[illegible]とみて

律師慶暹

[illegible]人のしるしをひとつてこれハおもひね[illegible]
世の[illegible]とゝめけるこゝろみのそての衣かな
[illegible]かけしうちおもひと侍て

[illegible]

[illegible]人の[illegible]とりてあそはれ[illegible]の浦

後朱雀院かくれ給てのち源三位かもとに
つかはしける　弁乳母

あはれきみいかなる野への煙にてむなしきそらの雲と成之

返し　源三位

思ひきえ[illegible]煙にまかひて[illegible]のかさ[illegible]
大江ちかひつよのちるまちあひて[illegible]
[illegible]河のもみちみにまかりてよみ侍て
[illegible]てわか[illegible]けるときて

能因法師

あはれ[illegible]の今はとき[illegible]ハ難波の[illegible]

題しらず　大江匡房朝臣

[illegible]もとふむらのゝよそとみつやからやつておもらしや

俊頼朝臣身まかりてのちつねにまうで見ける人もと
てみるをりにつかはせ侍るとてよめる

新少将

うつまくら[illegible]のみやおもふとて[illegible]
時しかはれ侍りけるむ[illegible]よ侍りける
[illegible]の[illegible]しまうさん
てよみて侍りける

按察使公通

かずとしるよの人のいのち[illegible]あはれとよそに[illegible]
秋子内親王かくれ侍りて後悦子内親王とか
くれ侍りけるときそへてまかりて人々あはれなること
よみ侍りけるに[illegible]

ならび侍りける　中院右大臣

あはれにもおもはぬ[illegible]の[illegible]
権中納言通家母かくれ侍りける秋摂政
大臣の許につかはしける　皇太后宮大夫俊成

かずやしるらむ[illegible]の[illegible]
ぞし

摂政太政大臣

[illegible]夏よりわつらひてまかりけれはかならすとひしものを[illegible]

母の思ひに侍りけるころとふらひける人のもとへ

[illegible]てはへりけるかつねはすみける

藤原清輔朝臣

世の中をみしもきゝしもはかなくてむなしき空の煙なりけり

すまゐのこゝろを

西行法師

いつくにもすまれすはたゝすまれなはのちの世まてを人のまくらし

前大僧正慈円

みな人のしりかほにしてしらぬかなかならすしぬるならひありとは

きのふみし人はいかにとおとろけとなをなかき夜の夢にそ有ける

蓬生にいつかをくへき露の身はけふの夕暮あすの曙

我はいつかわれも人をもとふへきといふころひや

前参議教長高野にこもりて侍りけるか

やまひかきりに侍るよしをきゝて頼輔卿まかりけるほとにみまかりぬときゝてつかはしける

寂蓮法師

たつねきていかにあはれとなかむらん跡なき山の峰の白雲

人にをくれてなけきける人につかはしける

西行法師

なき跡の面影をのみ身にそへてさこそは人の恋しかるらめ

うけくまかりける人のとはすなり侍りけれは
あはれさんに思ふらむとはれぬ身のくはこそ袖ぬれめ
世中のはかなきを　入道左大臣
はかなしと思ふにもいとと人のあはれをきくにつけ
左近中将通宗か墓所にまかりてよみ侍
りける　土御門内大臣
をくれゐてみるか世すてしこけのしたの露と消えなて
先妣法既ちかくなり侍りて周忌のはてに
墓所にまかりてよみ侍ける
前大僧正慈円

うこゑを思ひてまかりてこれはことしのことし神な月から
母のおもひにてやしろのあたりにこもりて侍りける
時雨のふりけるころやよそにてきけるにもかなしかりける
ときもさらにいのちのひ侍りけるをりしも雨ふりしよ
み侍りけれはかなしさのあまりにかの堂の障子にかきつ
け侍りける　大夫的忠
あきとる夜の雨しせけるにねえもいてそつれなかりける
ちくちかりし人の身かくれてさそふかなみよそて
よみ侍りける　法性寺入道
みし人は世にもなきさのもしほ草かきおくたひに袖そしほるる

この身まかりよまさるすゑのこの夜々のあけぬれ
まちわびしわかきつる花もちる花のちりまきぬれ
とよめる
祝部成仲
あさみどりのあけぼのへや袖のうへに花桜よりもあまりこそすれ
能因法師がまかりてはよみ侍ける
藤原兼房朝臣
ありしよにかへりてみるもなかりせば長きよとこそいひてやみぬる
露ちくおきて又のとしの秋こゝろ同侍りける
をよみ侍りける
権中納言通俊
とふ人もなくてかさなる霞のかゝる秋のはなぞれ

堀河院かくれ給て後よみける
権中納言国信
京ちかくそでよるかたもあらずまち杉のいとはせざりしひとぞこひしき
かはりまさる去山冨まさるわくれはそれ
くとしもおもて侍まつあかさ高き京人
まちわびておもはずみちまとはぬべきいとしい
うけ侍けれは
左京大夫顕輔
いのちあらば山のはゝるかにてもしらぬとをたふるは
ちよの御門をおさめたてまつれるとて
人麿

久里のおほみたからにて見ゆる月日もまさりて恋しかるらん

題しらす　小野小町

あるところにおなしさまなる女あまたありけれハかへしに歌
之

業平朝臣

白玉かなにそと人のとひし時露とこたへてきえなましもの
を

更衣此服にてまいりてまかりけるをきゝてよみて

延喜御製

年ころハかりなかりにおはしまして後よりあはれなる
おもひきや人のあはれにやとりけるそのあ
はれに草のたよりにくれハかへしつかりし

ける

中納言兼輔

ある人をとふらひにて八乙御かくれにけるとやまひをしてよ
よみかへるまゝうつくしきさまにてよめる
よゐくよゝつくれてとられまかりてゐて大弁
右兵衛人に侍りけるあひてむかしてハつかまつる
つほりにてまかりそのけるとくハかはりにを
もとめてつかはしけるたゝハる兵衛たよりつ

ける

藤原季縄

梅かゝる後にわすれもしらけりてたみ
母乃女御のくれ侍りて七月七日によみ侍ける

中務卿具平親王

墨染の袖ハ空にもかさなくにしほりもあへす露そこほるゝ

うせにける人の文の物の中なるを見出て

そのゆかりなる人のもとにつかはしける

紫式部

くれぬまの身をは思はて人の世のあはれをしるそかつははかなき

新古今和歌集巻第九

離別哥

みちの國へまかり侍りける人にさうそくおくる

とてよみ侍りける　紀貫之

玉ほこの道の山風寒からはかたみかてらにきなんとそ

思ふ

題しらす　伊勢

わすれなん世にもこしちのかへる山いつはた人にあはんとすらん

遠き所へまかりける人のわかれ侍りしに

紫式部

北へゆくかりのつはさにことつてよ雲のうは書かきたえすして

ものへまかりける人にまたひとへつかはしけるとて
大中臣能宣朝臣
秋萩の花摺衣きてみよ露をきまさる旅やくらむ
たちのくりてもなる人に
貫之
みてたにもあかぬ心を玉ほこのみちのたくやそて人の袖
あふさかのせきちかきやとにすみ侍けるに
とをき所にまかりける人に餞し侍る
とて
中納言兼輔
あふ坂の関にわかやとなかりせハわかるゝ人をたのまさらまし

宗叡上人入唐し侍りける時装束をくりてとそ
まうてきたりけれはとてをくりてつかはしける
よみ人しらす
きみかせとおもふ袖をつゝともさをもふる
をし　宗叡法師
ゆきやらぬ八重みえてそてにこほるゝ露ときゝつゝ天のこゝろ
聞しらん　遍昭
衣川みなれし人のわかれにはたもとまてこそ浪はたちけれ
天ちのくにみすけてまかりける時兼家朝臣の
もとよりつかはしける　高陽院理書朝臣に

[illegible]のちに[illegible]

せし　　藤原範永朝臣

[illegible]

[illegible]

て　　枇杷皇太后宮

[illegible]の松[illegible]

[illegible]

[illegible]法師[illegible]

[illegible]

て[illegible]よみ侍ける

一条左大臣

秋の月[illegible]

題しらず　大[illegible]

わかれての後もあひみんと思へともこれをいつれのときとかはしる

成尋法師入唐し侍りけるに母のよみ侍ける

もろこしもあめのしたにそありときくてる日のもとをわするな

[illegible]人のもとにつかはしける

道命法師

わかれちはこれやかきりのたひならむさらにゆくへきここちこそせね

[illegible]七月七日[illegible]

ゆふくれわたることは世の月ていとのおもひ侍す

まとひて身はつゆのたよりにつかはしける

加賀左衛門

天河元よきこえてよそにまよひかねてけさは此す

実方朝臣みちのくにへ下り侍りける餞に

とてよみ侍りける　中納言隆家

わかれちるはいつよりけふのやまとぬはいとゝつらき秋の夕暮

色し　藤原実方朝臣

ときまんことは心かろくもいつの世よ秋のはつ風

七月七日みやこの人

はへりける　権中納言通房

契とは秋とたにたのまれし涙の河霧もたちそひ

みこの宮と申しける時大宰大弐実政学士にて

て侍りける甲斐守にてくたり侍りける餞た

まはすとて　後三条院御製

わするなよおなしそらとは月をみよ程は雲井にめくりあふまて

みちのくのちゝのもとれの数にひさしく

おもむきねかひしていつの年までといひ

侍られて　基俊

契りおきしさせもか露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり

縁紹にそ侍けるにあたる

大僧正行尊

おもひしにもあらすよの中のあはれにいつとなくたちなからへここちしあはれ
よそにはおもひしかとたれてしもとはくまておもひもえぬ
せまつりけれはよみ人しらす
ひとなくさめにこころのみいかにもそなきにもあるをは
われの心をあはれ　俊恵法師
ゆふくれのかねをきくにつけてもなほかなしきは　有心
登蓮法師
いまはこのよにすみなれぬ人によそなからかくそとおもひやる

宇治法師はかれにゆきあひて侍りける時
藤原隆信朝臣
ゆくすゑはわかれのみかくこそありけれ松浦の奥をもとむる人
登蓮法師つくりいてまゐらせて
俊恵法師
たよりなくなりゆくものとそおもふにつけても袖はぬれける
みちのくにまかりける人に餞し侍りける
西行法師
さいはひに月のたよりをまちわひてもろともにみえしかな
とおもふにつけてもなをそかなしき侍る人

よわかれ侍りてよみ侍ける
たのめこしことのはやかへさむとて人事ハいつとなくとも
まち／＼とおもひしをのこそその山路をこえぬ別を
と頼にけれはまうてけるに師走の餞し侍る
とそよめる　　道因法師
逢まてはむかしをおしとおもひしにいまはさへこそつらきなりけれ
題不知　　皇太后宮大夫俊成
あはれなる縁みわかれと思ふ世はつらからむとはおもひしかとも
祝部成仲
わかれにし人をたのみしおもひこそ今はまさるらめ

宮内卿尼
わするなよやとる袂ハかはるともかたみにしほる夜半の月影
秋の比人まかりけるにおくりてよみ侍りける
惟明親王
名残おほき袂にやとる月影のわかれし縁の名残さへ
はかなくまちける月にけるかなしき
つかはしける　　よみ人しらす
契りしは心をかけよそねたる月をみしひとよはとこさえよ
とはすなりにける人につかはしける
大蔵卿行宗

わかれちは雲ゐのよそになりぬとも風の便にとくとはれ

人の国へまかりける人につかはしける　藤原範綱朝臣

冬ふかくわかるゝ旅のそらにみえてむすびそのかたみをもみよ

新古今和歌集巻第十

羇旅歌

和銅三年三月藤原の宮よりならの宮にうつり給ける時　元明天皇御歌

とぶとりのあすかのさとをおきていなばきみがあたりは見えずかもあらん

天平十二年十月伊勢国に行幸し給ける時　聖武天皇御歌

いもにこひわかの松原みわたせばしほひのかたにたづなきわたる

もろこしにてよみ侍ける　山上憶良

いさこともはやひのもとへ大伴のみつのはま松まちこひぬらん

題しらす　人麿

あまさかるひなのなかみちをこきくれはあかしのとより山と嶋みゆ

さゝのははみ山もそよにみたるなり我はいもおもふ別きぬれは

帥乃任はてゝのほり侍りて　大納言旅人

こゝにありてつくしやいつこ白雲のたなひく山の西にあるらし

題しらす　よみ人しらす

朝霧にぬれにし衣ほさすしてひとりや君か山ちこゆらん

あつまよのくゝまゝわまろしわさやよのかけし

はるよのけふりをみてそしめる

在原業平朝臣

信濃なるあさまのたけにたつ煙をちこち人のみやはとかめぬ

するかのくにうつの山にてあへる人につけて京、

につかはしける

するかなるうつの山へのうつゝにもゆめにも人にあはぬなりけり

延喜御時屏風哥　凡河内躬恒

浪乃上にほのかにみえてゆく船はうらふく風のしるへなりけり

貫之

草枕ゆふかせさむくなりにけり衣うつなる宿やからまし

題しらす

しら雲のたなひきわたるあしひきの山のかけはしけふやこえなん

壬生忠岑

東路のさやの中山さやかにも見えぬ雲ゐに世をやつくさん

伊勢より人につかはしける

女御徽子女王

人をなほうらみつへしやみやことりありやとたにもとふをきかねは

題しらす

菅原輔昭

またしらぬふるさと人はけふまてにこんとたのめし我をまつらん

よみ人しらす

しるかとはいろみえぬ[illegible]あさま山[illegible]して

神風の伊勢のはま荻折ふせて旅ねやすらんあらき浜辺に

亭子院[illegible]て山にて[illegible]

[illegible]ころ[illegible]ともに侍て[illegible]思ひねと

[illegible]人に[illegible]侍[illegible]よめる

たつの[illegible]のさとにみてつらは旅やすむ[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]人[illegible]一本を

藤原輔尹朝臣

[illegible]

題しらず　　御形宣旨

家にてちちの兄をとゐあつて書ぬるにひとりねむき給ら

入唐し侍ける時いつとよ思ふへきと人

のとひ侍けれは　　法橋奝然

頼みけるにゆるしをとひけれは侍し雲の捨

志賀の山こえのしきまてあらひまうて身みとおもふ

てよみ侍ける　　実方朝臣

舟にのりてひとりは頼ぬをむ志賀の浪に夜はかむ絶

いろのへちのまに暁ちかし侍まうてとまらて

おほ国ちかきつねよしあひてゐとのい

たやのむかへとてあまた人のみてまうて

暁ちかみて八この道をとゞめてよみ

侍ける　　大僧正行尊

ゆくりなく許をとかはなきまへ人とあまたみ路とさきよ

こつかみの秋そてしちみえぬへきよるとや

まうてとやてよみ侍ける

志武部

野をすきゆくに流のあつくかれきしる舟をさし渡

天まるよいのまろてるみ八の浦よとやて

よみ侍ける　　肥後

さ夜ふけて葦のすゑこす浦風にあはれうちそふ浪の おとかな

旅の歌とてよみ侍ける　大納言経信

旅ねして暁かたの鹿の音にいなはおしなみ秋風そ吹

恵慶法師

わきもこか旅ねの衣うすきほとよきてふかなん夜はの秋風

後冷泉院御時うへのをのことも旅の歌よみ侍けるに　左近中将隆綱

芦の葉をかりふきてふす津の国のこやもあらはに旅ねするかな

いのち侍る人にまかれてのちにかれはまう
てなるとかいひおきけることをきゝてたつね
ひて枕よせよとて人のさしいて侍けれはよみ
侍ける　赤染衛門

あまてよのひさ旅ねをおもはましかはいかゝあかまし草まくら

堀河院御時百首歌に　権中納言国信

山路にてそほちにけりなしら露のあかつきおきの木の雫に

大納言師頼

草枕たひねの人は心せよ有明の月もかたふきにけり

ゐる旅宿といふことをよめる　法師覚範

いかなれは宮こ人は旅ねする苦屋のまろ屋にかゝる白浪
しるしみちにてよみ侍ける
大納言経信
旅ねするあしのまろ屋の寒けれはつま木こりつむ舟いそくなり
題しらす
み山路にまよひつる旅人の笠さへ今夜ふりつもりて
旅宿雪といへる心をよみ侍ける
修理大夫顕季
松かねにお花かりしき夜もすからかたしく袖に雪はふりつゝ
みちのくに侍けるに八月十五夜に京を
思ひやりて人のもとへつかはしける
橘為仲朝臣
見し人もとふのうらかせおとせぬにつれなくすめる秋の夜の月
せきとの院といふ所にて羇中見月といふ
心を
大江嘉言
草枕かりそめにとてきて来る人の月にねかたき
宇治法親王家にして羇中見月といふ心を
よみ侍ける
皇后宮大夫俊成
夜もすからふしのたかねに雲きえてきよみかせきに月みれは
立よりてまし松かけにこの宿やはるかにかへる心ちこそすれ

藤原定家朝臣

まとろよみぬよの涙にやとるくしきみる月影

藤原家隆朝臣

野辺の露うらわの浪をかこちても行衛もしらぬ袖の月影

摂政太政大臣

しろたへの衣ほすてふ紀の山人あまてらす月

影しらし

西行法師

思ひて月をおもはれ出る月をねかはぬ身となるらむ

月みてとおもひ出つゝ人の心やかへる袖ゆかしけむ

まつそ行かはらぬ時

家隆朝臣

明はまたこゆへき山のみねなれや空ゆく月の末のしら雲

藤原雅経

たてのはしの春とつけさらひ月よそ登るさよの中山

和泉にて月をみそあまの海のかけてよ月影

摂政太政大臣

旅とえるふたる人しつまよふて

いかにとすてて出にし我なれとへつねも身のうきをみる月

旅行とてよみ侍ける

前大僧正慈円

東路の末よの名あはかてらん出の山よかゝる月影

海濵重来と云事をよみ侍し

試前

来ても八月なおしれるあきて流よおもくいさの濵萩

るそこおもへは　民部卿成範

寺てまへやそせの流をとゝめてかくし持そ行きのゝまゝ萩

題しらし　前中納言定房

風さむみいさの濵萩分ハ出てたね流よ鳴ちる

権中納言定頼

いそれそてとけぬこゝ枕おくるけて氷の流

るそ有しそやよそのしき

式子内親王

行とまて今まて来とハいりての帝の名ねよ枕むすとなしむ

松ねのうち流の磯のさよ枕いそくるわれそおもよみ袖ハ

千也ろ番有人んて　皇太后宮大夫俊成

かそくしおもせハと来まれん山路のまをみ成のむしろて

旅よてよみ侍し　権僧正永縁

しら雲の明る旅ねさゆるハねよゆき山路よ日ハ暮ぬよお

重ね行やおと見るてるそ

大納言経信

久方の(?)…わかれしに旅人の心のあはれいつくよりそふ
摂政太政大臣家歌合に羇中晩嵐といふ
事をよめる　藤原家隆朝臣
いつくにか今夜はやとをかり衣日もゆふくれのみねのあらしに
旅の哥とてよめる
旅人の袖吹かへす秋風に夕日さひしき山のかけ橋
家隆朝臣
あらましはけふわれみつるおもはれは人ことさやの中山
藤原雅経
白雲のいくへの峰をこえぬらむなれぬあらしに袖をまかせて
源家長
はるかなるね野原に紛ひぬいつまてみ山を月は出けん
和哥所歌合に羇中暮といふ事を
皇太后宮大夫俊成
あらぬみ秋は夕をかさみえて風のをとそくるもとの原
いつなまこくやあさまの夕煙ひとつねもとの山
雅経
宜秋門院丹後
都をはわかれつゝきてかつはらふ雲のへたてを
藤原秀能

草枕ゆふへの空を人とはゝなきてもつけよ初かりのこゑ

旅のこゝろを　有家朝臣

ふしわひぬしのゝをさゝのかり枕はかなの露や一夜はかりに

石清水哥合に旅宿嵐といふことを

いくたひの床に山風をかこちてもひとりやねつるさよの中山

旅歌とて　藤原業清

まちわひて宿のゆふへを思ひつゝいつかとおもふにくもりはてなん

羇中夕といへる事を　雅経

枕とていつれの草に契るらんゆくをかきりの野への夕暮

おほ川よりのほりまかりける道にてよみ侍ける

民部卿成範

道のへの草の青葉に駒とめてなほふるさとをかへりみるかな

長月のころはつせにまうてける道にてよみ

侍ける　禅性法師

初瀬山夕こえくれて宿とへはみわの檜原に秋風そ吹

旅哥とてよめる　藤原秀能

さらぬたに秋の旅ねはかなしきに松に吹なり床の山風

摂政太政大臣家哥合に秋旅といふ事を

定家朝臣

またれつるむすひちきりをかけていのらんみ山のみねの松風

るよし申させて侍ける時読侍

平隆教

経よみは一乗をこゝぬは次第流にわかるゝおろかの雲

千五百番歌合に

おなしあまの人ともまの松かえし袖に流やすらむ

歌合し侍ける時旅のこゝろをよめる

入道前関白太政大臣

日をへつゝ都しのふの浦さひて浪よりほかのおとつれもなし

堀河院御時百首歌たてまつりける時旅歌

藤原顕仲朝臣

さゝなみやおれふしゝ葦もやすらひてやとりそさきやまのはねね

入道前関白家百首歌に旅の心を

皇太后宮大夫俊成

難波人あしひたくやに宿かりてすゝろに袖のしほたるゝかな

題しらす

僧正雅縁

又こえむ人もとまらはあはれしれ我おりしける峰の椎しは

前右大将頼朝

道すからふしのけふりもわかさりきはるゝまもなき空のけしきに

述懐の歌とてよみ侍ける旅の歌

皇太后宮大夫俊成

世中はうきふししけししの原や旅にしあれはいも夢にみゆ

千五百番哥合に　宜秋門院丹後

なにかつれなきよにすまぬ宿をかれこと人なはいてさえし

天王寺へまかりて侍りけるに俄に雨のふりけれは江口にやとをかりけるにかし侍らさりけれはよみ侍りける　西行法師

世中をいとふまてこそかたからめかりのやとりをおしむ君かな

返し　遊女妙

世をいとふ人としきけはかりのやとに心とむなとおもふはかりそ

和哥所にてをのことも旅の哥つかうまつりしに　定家朝臣

袖にふけさそな旅ねの夢もみしおもふかたよりかよふ浦風

家隆朝臣

旅ねする夢路はゆるせうつの山せきとはきかすもる人もなし

詩を哥にあはせ侍りしに山路秋行といへることを　定家朝臣

都にも今や衣をうつの山夕霜はらふつたのした道

鴨長明

袖にしも月かゝれとは契をかす涙はしるやうつの山こえ

前大僧正慈円

よし山秋の人の袖をみよかしみ猶そ時雨さかなる
るを許してまろつしさひの許
さとやまとの道に入われは忘て咲きまてもなし
をれ風よまうてこえまつおもひの川のなかる
ふやまれて侍る秋よみ侍ける

寂覚法師

れてへこそこそあをとの川きぬきさき関をたつる
あつまの方にまかりけるによみ侍る

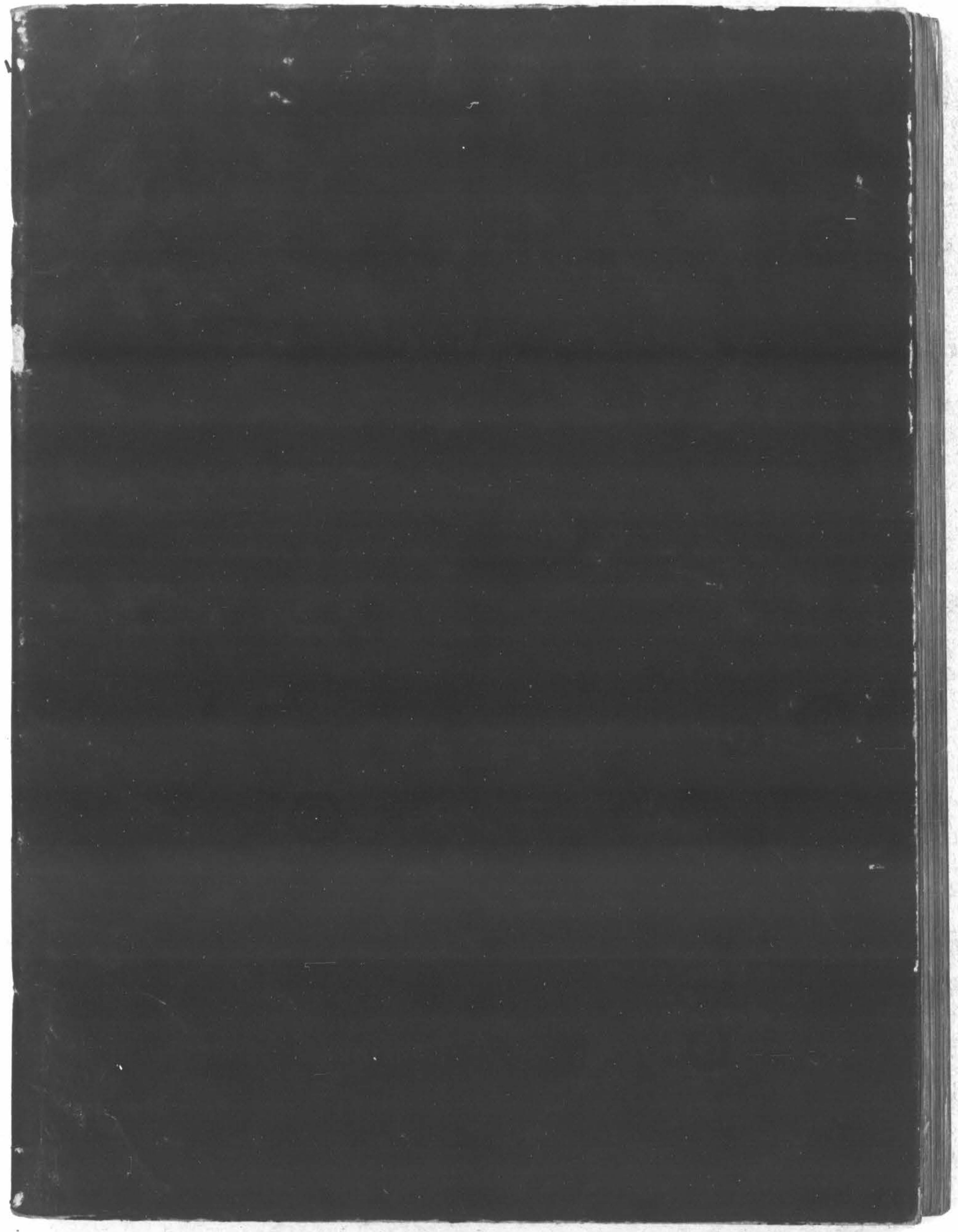
西行法師

年たけて又こゆへしと思ひきや命なりけりさやの中山

旅乃許とて

たちはなる人の心にまかせて露る袖のそをかぬるかな
くもの上やお休しに旅の心を

たよ天皇

みよしのは山もせおろくさこそめあきもやよは
来さむちるらむ

九州大學圖書印